茨城県笠間市

宍　戸　城　跡

－店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２００６

株式会社　コ　メ　リ
山武考古学研究所

SE01全景（東より）

出土遺物（1）

例　言

1　本書は、店舗建設事業に伴い発掘調査が実施された、宍戸城跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2　調査は、笠間市教育委員会の指導のもと、株式会社コメリの委託を受けて山武考古学研究所が実施した。

3　遺跡の所在地・調査面積・調査期間・担当者は下記の通りである。

所 在 地　茨城県笠間市平町字殿町78-1、79-1　調査面積　678.17㎡

調査期間　平成18年（2006）7月28日～同年8月10日　担 当 者　間宮正光

4　本書の作成及び執筆は、山武考古学研究所において間宮が担当し、木村春代、大関美穂が補佐した。

5　出土した木製品については、樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、成果をⅥに掲載した。

6　調査により得られた資料は、笠間市教育委員会が保管・管理している。

7　発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々にご指導・ご協力を賜った。（敬称略・順不同）

川崎純徳　能島清光　南 秀利　小谷清治　井上哲朗　平田満男　辻本崇夫　茨城県教育庁文化課

笠間市教育委員会　㈲渡辺設計事務所　㈱スカイサーベイ　㈲カワヒロ産業　パリノ・サーヴェイ㈱

8　調査の参加者は次の通りである。　中島貞雄　中島秀雄　中島トミ子　藤井一康　本田 実　表 豊

凡　例

1　遺構の詳細は一覧表に記載した。規模は中軸線上の壁上端を計測し、主軸方向は長軸線が座標北に対して何度偏針しているかを記載した。また、深度については最も遺存の良い壁上端を基準としている。

2　本書に用いた略号は、SB：建物跡　SD：溝跡　SE：井戸跡　SG：池跡　SK：土坑　P：ピットである。

3　本書に使用した基本的な図面の縮尺は以下の通りで、これ以外については図中に明示した。

遺構：建物跡・溝跡・池跡 1/80　井戸跡・土坑 1/60　遺物：土器・陶磁器 1/3・1/4　木製品 1/4・1/5

4　出土遺物観察表中の計測値は、( ) が復元値、＜＞が残存値を示す。

5　掲載した遺物には、遺構毎に番号を付しており、本文・表・図面・図版共に一致している。

目　次

例言　凡例　目次

Ⅰ　調査の経緯と経過　調査に至る経緯 …… 1

調査の経過 …… 1

Ⅱ　環　境　地理的環境 …… 1

歴史的環境 …… 3

宍戸城の構造と考古学的調査 …… 3

Ⅲ　調査の方法 …… 5

Ⅳ　遺跡の立地と堆積土層 …… 5

Ⅴ　遺構と遺物　概　観 …… 6

遺　構 …… 6

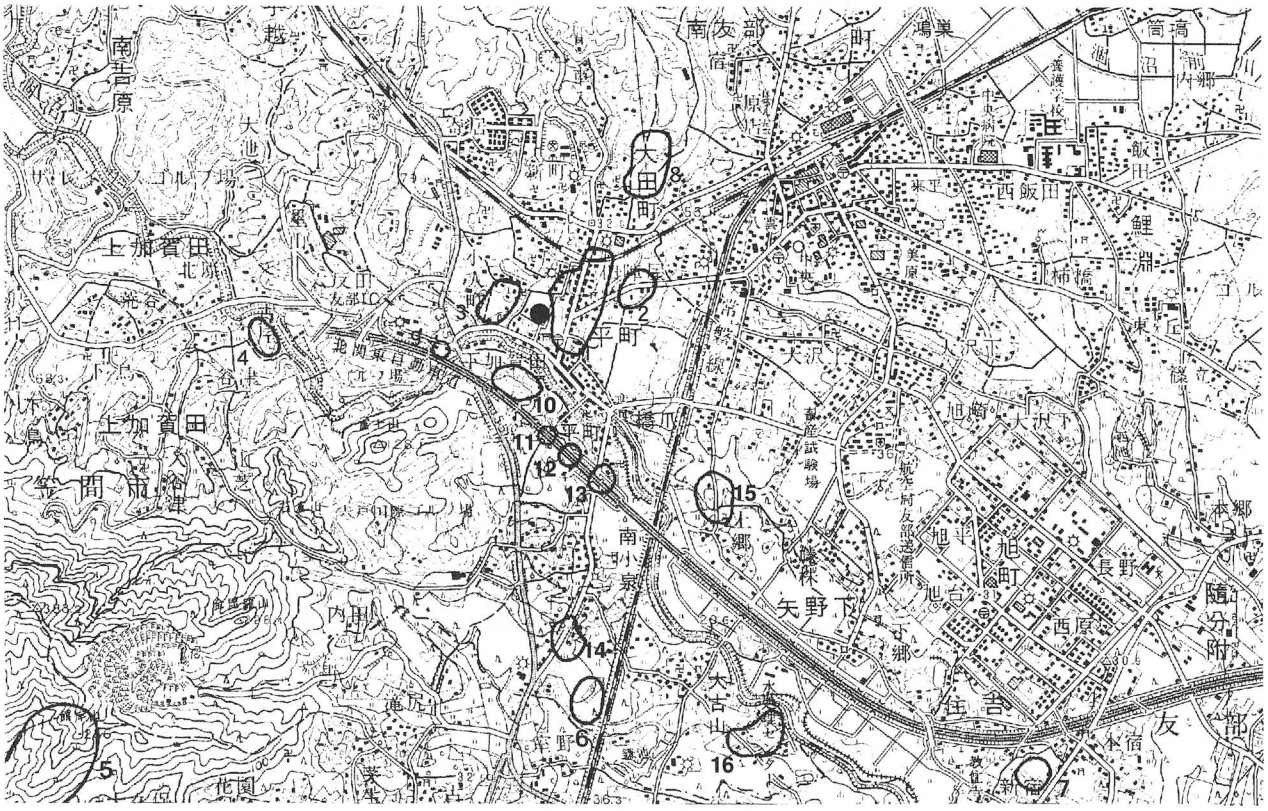
遺　物 …… 10

Ⅵ　出土した木製品の樹種 …… 13

Ⅶ　総　括 …… 15

図面　図版　報告書抄録　資料の取り扱い

第１図　遺跡の位置と周辺の地形(1/25,000 明治17年測量、同28年修正、同30年再修正　迅速図「岩間」･「下郷村」を縮小)



第２図　周辺の主な中･近世の遺跡(国土地理院発行1/50,000 「水戸」･「石岡」)『茨城県遺跡地図』より　　●調査区の位置

1 宍戸城跡　2 古館　3 新善光寺跡（山尾館跡）　4 上加賀田城跡　5 舘岸城跡　6 佐藤氏館跡　7 住吉城跡
8 完全寺後遺跡　9 高土台塚群　10 下加賀田遺跡　11 坂の上塚群　12 古峯Ａ遺跡　13 古峯Ｂ遺跡
14 南小泉遺跡　15 上郷遺跡　16 大古山遺跡

Ⅰ　調査の経緯と経過

調査に至る経緯

平成18年３月20日付で株式会社コメリより、笠間市平町字殿町地内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が笠間市教育委員会に提出された。当該地は宍戸城跡の範囲内に隣接し、過去の調査においても中世末から近世前半の遺構及び遺物が検出されていることにより、遺跡が所在する旨の回答が事業者宛になされた。この後遺跡の取り扱いについて事業者と協議し、遺跡の状況把握を目的として確認調査を実施することになった。確認調査は、笠間市教育委員会が川崎純徳茨城県埋蔵文化財指導員に委嘱して、平成18年５月４日に実施し、近世前半に帰属する遺構と遺物が検出された。

これを受け、茨城県教育庁文化課の指導のもと、事業者と保存について協議したところ、事業の変更は難しく記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。調査は事業者の委託を受けた山武考古学研究所が実施することとし、平成18年６月27日、株式会社コメリ、笠間市教育委員会、山武考古学研究所が三者協定を締結した。また、同日付で文化財保護法第92条第１項の規定による埋蔵文化財発掘調査の届け出を行い、川崎純徳・能島清光両氏を指導委員として平成18年７月28日～同年８月10日まで調査を行った。

調査の経過

調査地は沖積低地に位置し、現況は水田のため調査準備として、開発地内の水抜き作業を平成18年７月24日より同月27日まで行った。水抜き作業にあたっては、遺構確認面までを深度とした排水溝を４本掘り下げ、水中ポンプを用いて場外へ排水した。

７月28日、調査を開始する。調査区を第４図の通り便宜上、本体部分、Ａ～Ｆ区に分け、Ａ区から表土除去に着手し、本体部分、Ｅ・Ｆ区へと進めた。なお、表土除去の終了は８月３日である。遺構の掘り下げは表土除去と併行して行い、７月31日にＢ～Ｄ区の掘り下げをほぼ終了する。８月１日にはＡ区で検出されていた石組井戸と建物跡の構造が明らかとなり、翌２日に笠間市教育委員会、指導委員の視察を受ける。８月５日、遺構の掘り下げをほぼ終了し、遺跡の全容が明らかとなる。これを受けて８月７日、茨城県教育庁文化課の視察を受ける。８月８日、写真測量で遺構平面図を作成し、井戸跡及び溝跡内に構築された石組の解体をはじめる。８月10日、石組の解体を終え調査器材を撤収し、発掘調査を終了する。

８月14日、遺物発見届・保管証などの発掘調査終了書類を関係機関に提出し、整理調査に着手する。整理調査は、遺物水洗い・注記・接合、図面・写真整理へと進め、調査資料を分析して報告書としてまとめた。

Ⅱ　環　境

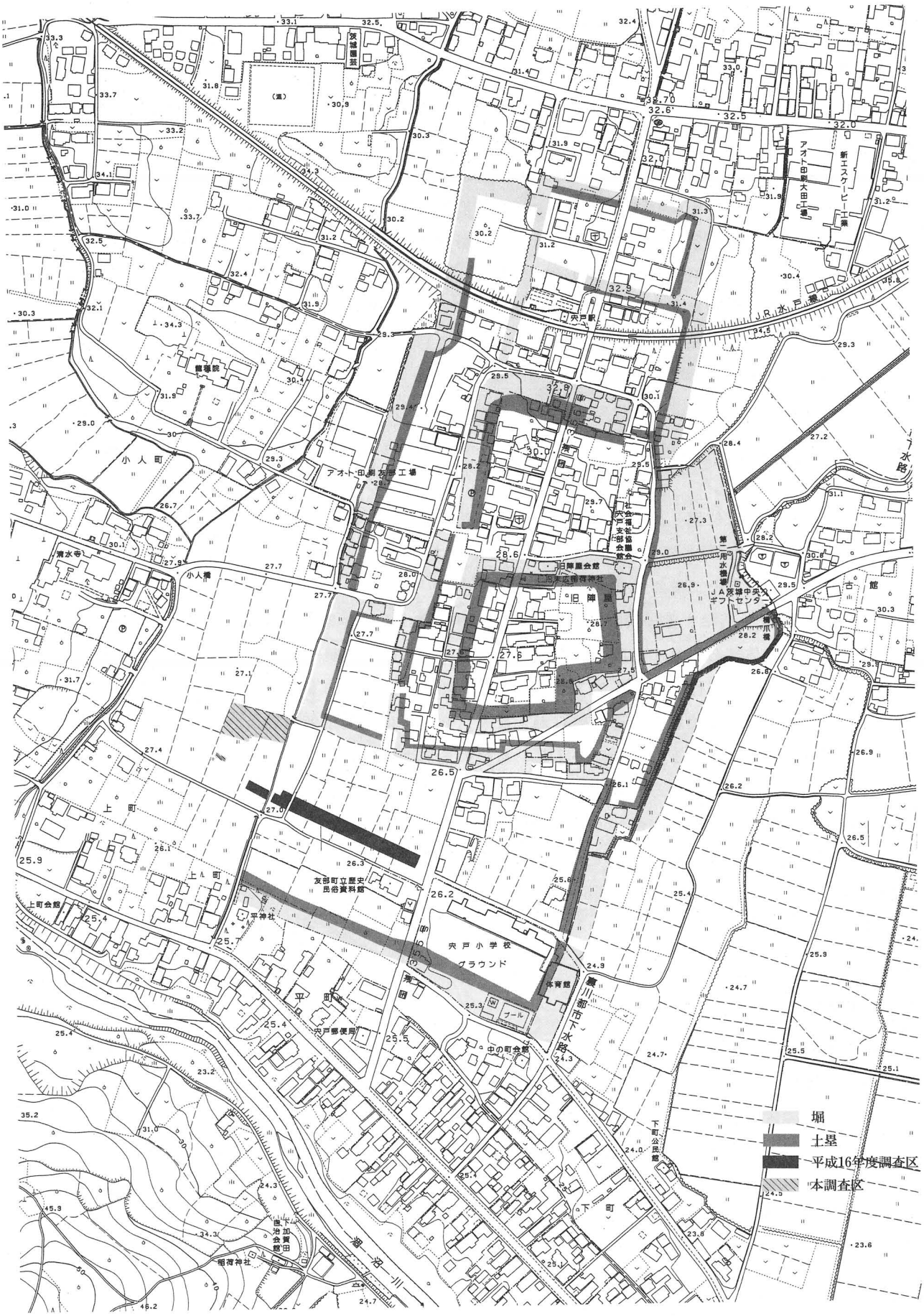
地理的環境

遺跡の所在する笠間市は、茨城県のほぼ中央部を占め、平成の大合併によって、平成18年３月に笠間市・友部町・岩間町の１市２町が合併して新たに誕生した市である。

遺跡は、新たな市域の中央やや東よりに位置しており、旧の行政区分では友部町に所在する。

笠間市の地形を概観すると、北部は八溝山地に連なる鶏足山塊の末端で、標高100～200ｍの山内山・十文字山などの山地が屏風の如く連なり、周縁は友部丘陵と呼ばれる丘陵地帯となる。また、南東部は標高30～40ｍの東茨城台地となり、中央部には国見山付近を水源とする涸沼川が東の涸沼に注ぐべく貫流する。

宍戸城の所在する平町地区は、これらに囲まれて小規模盆地を呈しており、調査区は、JR 水戸線宍戸駅の南方約500ｍで、東流する涸沼川を南に臨む標高27ｍほどの沖積低地上に位置している。



第３図　宍戸城跡想定図と調査区の位置(1/5,000『茨城県教育財団文化財調査報告第256集』をもとに作成)

歴史的環境

安定した台地と水量豊かな河川は、人々の生活に適していたようで旧石器時代から近世に至る様々な遺跡が分布している。それらについては、茨城県教育財団発行の文化財調査報告第256集『新善光寺跡　宍戸城跡』に詳述されているのでそちらに譲り、ここでは遺跡の主な時代である中・近世について概観する。

中世、この地は宍戸荘と呼ばれ、鎌倉初期以来、常陸守護職にあった八田知家の四男家政を祖とする宍戸氏が代々支配する。宍戸氏は、小田一族として一時は守護職を奉じ、庶子を輩出しながら南北朝期や結城合戦などの戦乱を生き抜き、戦国期には筑波四十八館の旗頭として佐竹氏の麾下に属していく。天正 18 年（1590）の小田原の役に際しては、15 代義利が佐竹氏らと共に豊臣秀吉に謁見し、6 万 1000 石余りといわれた旧領を安堵されるが、その後佐竹氏と常陸統一の過程で争うことになる。この結果、宍戸氏は佐竹氏の一武将となることで命脈を保つも、文禄 4 年（1595）には約 400 年間支配した父祖伝来の地を離れ、知行 6730 石で海老ケ島城に転封させられる。宍戸氏の居館については明らかではないが、古館とする説や宍戸氏の菩提寺で、海老ケ島城転封に際し移転した新善光寺と同一台地上の山尾館跡に比定する向きもある。平成 13 年刊行の『茨城県遺跡地図』により、周辺の城館跡をひろうと上加賀田城跡や住吉城跡の所在が確認される。

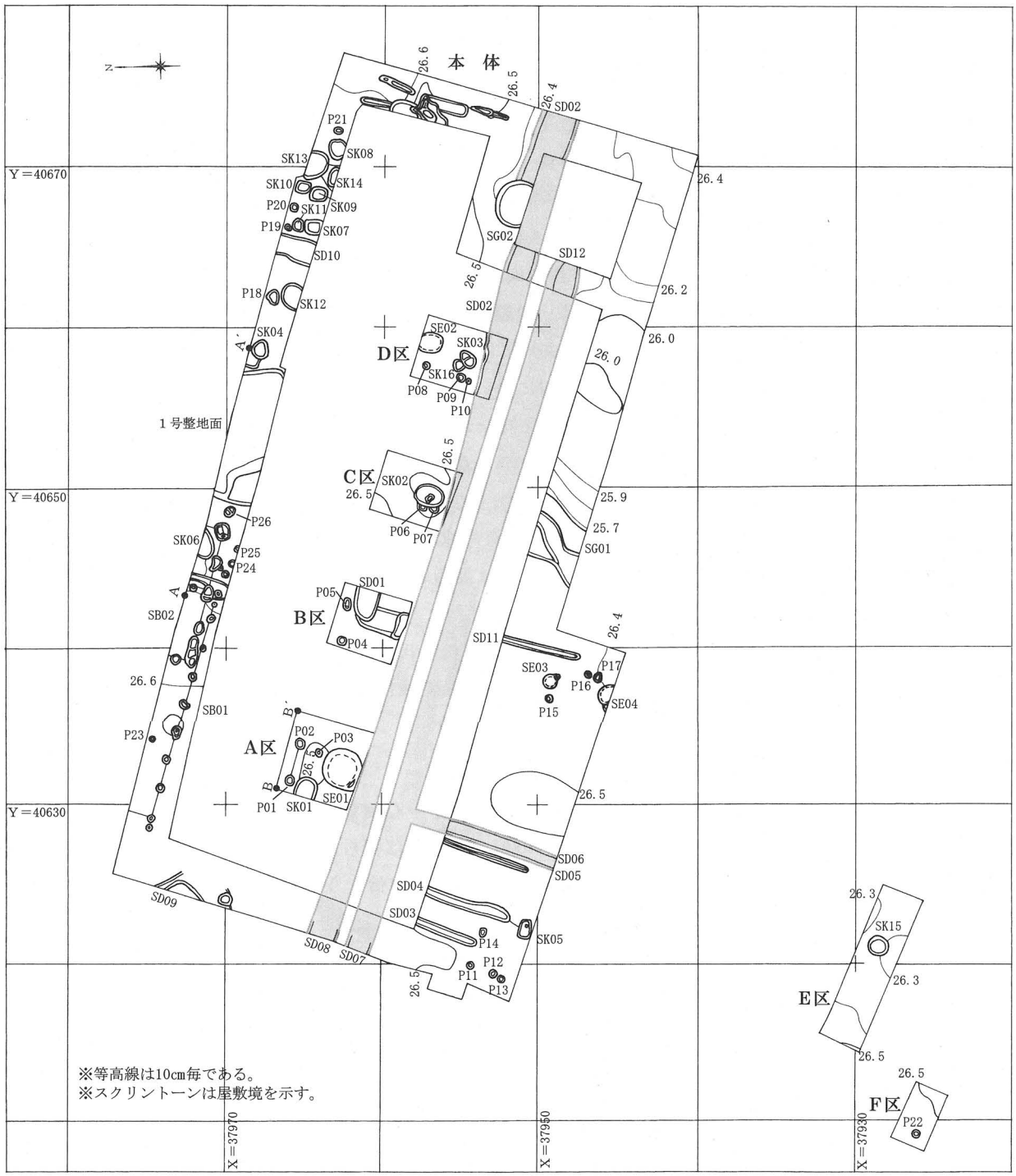
宍戸氏転封後の友部村以下 4 ヶ村は佐竹氏の直轄領となるが、慶長 7 年（1602）の秋田移封によって、宍戸には入れ替わりで秋田実季が 5 万石で入部する。宍戸城が近世城郭として整備されるのはこの時期である。秋田実季の跡は俊季が継ぐが正保 2 年（1645）には福島県三春へ国替えとなって、この地は幕府の直轄領へ移行し、43 年間機能した城は廃城され大部分は水田となった。天和 2 年（1682）になると徳川光圀の弟の松平頼雄が 1 万石をもって宍戸藩を再び立藩し、以後松平氏が明治維新までこの地を支配する。松平氏は、宍戸城の主郭を利用して陣屋を築くものの、本格的な築城はなされず宍戸城は再び機能することはなかった。

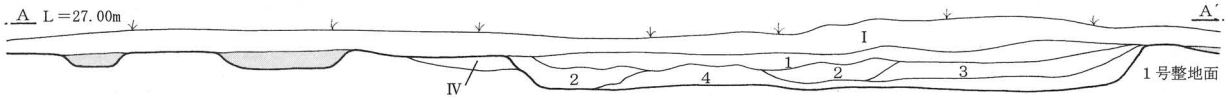
宍戸城の構造と考古学的調査

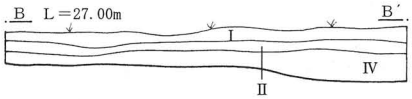
宍戸城は小規模盆地内に流れる小河川に挟まれた微高地を中心として築かれた平城である。築城は、中世この地を支配した宍戸氏に遡るといわれているもののその実態は明らかではなく、近世城郭として形を整えるのは秋田実季と考えられている。現在城跡は、宅地化が進み旧情をうかがうことは難しいが、正保年間に作成された「宍戸城下絵図」で当時の様相を知ることができる。これをもとに作成された第 3 図によると、長辺約 150 m の方形郭を中心に三重の堀と土塁を巡らす構造で、南と西は涸沼川と清水寺下の小河川を外郭線とする。現在本丸には、稲荷社が鎮座し周囲には土塁が残存するが、下位の郭を区画する堀は埋め立てられ、辛うじて残存する土塁も年々小さくなりつつある。北西の龍穏院周辺には新たな城郭を企画したといわれる宍戸新城が位置し、南限の堀と涸沼川の間には笠間街道が通り城下集落を形成している。

本格的な考古学的調査は、平成 16 年度に茨城県教育財団により、主要地方道改良事業に伴い実施された発掘調査が初見である。調査は 2,913 ㎡を対象に行われ、中世末から近世前半の掘立柱建物跡 17 棟、塀跡 5 条、溝跡 5 条、井戸跡 7 基、池跡 3 ヶ所、土坑 21 基、ピット群 4 ヶ所、柱穴列跡 3 条が検出され、東西に走る通りに面した屋敷割の南部分を調査したことで、「宍戸城下絵図」と合致する武家屋敷地の様相が明らかとなっている。さらに、近世に先行する掘立柱建物跡が発見され、中世に遡る可能性が指摘されている。

主な遺物は、内耳鍋や小皿などの土師質土器、火鉢・香炉・擂鉢などの瓦質土器と、貿易・国産陶磁器、木製品、鉄製品などである。数量では土師質土器小皿と内耳土鍋・擂鉢が多数を占めている。陶磁器を産地別にみると瀬戸・美濃、志野、唐津、常滑、丹波、信楽、肥前で、貿易陶磁は青磁、白磁、染付（青花）である。貿易陶磁では染付碗が群を抜いて多く、陶磁器全体を俯瞰すると茶陶の出土が目立っている。







※断面図のスクリントーンは遺構を示す。

0 (1/100) 2m

基本堆積土層

Ⅰ	黒褐色土	7.5YR3/1	表土。水田耕作土。しまり弱、粘性有。
Ⅱ	褐灰色土	7.5YR4/1	砂利・黒色粘土ブロックまばらに含む。しまり有、粘性弱。
Ⅲ	暗褐色土	7.5YR3/3	近年の整地層。砂・植物遺体多量に含み鉄分沈着する。しまり・粘性有。
Ⅳ	黒色粘質土	7.5YR2/1	腐植質の高い地山。しまり有、粘性強。
Ⅴ	灰白色粘土	7.5YR8/1	しまり有、粘性強。
1	褐灰色土	7.5YR4/1	砂・灰色粘土ブロックまばらに含み、鉄分沈着する。しまり・粘性有。
2	褐灰色土	7.5YR4/1	砂・灰色粘土ブロック多量に含む。しまり有、粘性強。
3	褐灰色土	7.5YR4/1	砂・灰色粘土ブロックまばらに含む。しまり有、粘性強。
4	褐灰色土	7.5YR4/1	砂・黒色粘土・灰色粘土ブロックまばらに含む。しまり有、粘性強。

第4図 全体図(1/400)・基本堆積土層図(1/100)

Ⅲ　調査の方法

調査は開発地内に建設される構造物の基礎部分を中心として実施されたため、調査区はトレンチ状となった。調査地からは、耕作土である表土を除去した段階で部分的に整地層が確認され、整地層の認められる部分についてはこの上面で遺構調査を行っている。調査にあたっては、調査区を本体部分とＡ～Ｆ区に分けて行い、遺構の存在しない部分に水抜坑を掘り下げ、さらに試掘坑を復元して水抜坑として活用した。

調査は、表土掘削、遺構掘下げ、記録の手順で進め、石組遺構は最終段階で解体した。遺構の掘り下げにあたっては、安全上から井戸は1.1ｍ前後までとしている。

遺構の記録は1/20の縮尺で平面･断面図を作成し、平面実測は写真測量で対応した。また、土層図の作成については可能な限り記録しているが、覆土が砂質で湧水が著しいことから、崩落の可能性が高いものについては土層図は作成せず土層の観察にとどめた。土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版　標準土色帖』に拠っている。写真撮影は、調査各段階に応じて随時行い、白黒35㎜、カラーリバーサル35㎜、白黒６×７判の３台を用いた。

整理調査は発掘調査によって得られた資料・遺物を対象として行った。遺物・図面など資料の取り扱いについては巻末に「資料の取り扱い」として一括の記載とした。木製品については、建築部材を中心に、木材の使い分けを明らかにすべく６点の樹種同定を行った。

なお、これらの資料については、本書の刊行後、活用を前提として、台帳などにより検索可能な状態で笠間市教育委員会が保管・管理している。

Ⅳ　遺跡の立地と堆積土層

小規模盆地内の微高地と沖積低地に立地する宍戸城は、地下水や湧水に富む集水地域に築かれた平城で、これらの水源は生活や水堀として利用されていた。

宍戸城跡の範囲について平成13年刊行の『茨城県遺跡地図』によれば、JR水戸線宍戸駅の北で大田町を北限として宍戸小学校を南限とする南北に細長い地域とされているが、「宍戸城下絵図」やこれまでの調査研究を参考にすると、西端は清水寺下に流れる用水付近まで広がるようである。調査地は、武家屋敷として使用されていた地区で、現在は水田として利用されている。調査では座標Ｙ＝40650～40660付近を南流する築城以前の流路が確認されている。１号整地面は、この流路を盛土整地する大掛かりな地業の跡で、屋敷の普請状況を物語る遺構である。ただし、周辺には堀が穿たれており現在よりも水位は低かったと推測される。

堆積土層は、水田として使われていたため、表土層は層厚20～40㎝前後の耕作土である。この表土層を除去すると第Ⅱ層の褐灰色土で、砂利及び黒色粘土ブロックを混入した整地層となる。この整地層が明瞭に確認されるのは、Ａ・Ｂ区と流路が存在する調査区中央部より東のようである。整地層の下部は第Ⅳ層の自然堆積層で、粘性が非常に強い腐植質の黒色粘質土となるが、北西及び南西部分では整地層は明瞭ではなく、表土直下がこの第Ⅳ層となる。第Ⅳ層の下は第Ⅴ層の灰白色粘土層となり、もともとの地形が東の盆地中軸線上へ向け傾斜しているようで、東では第Ⅳ層の層厚は薄く10㎝前後で下位の第Ⅴ層が確認される。第Ⅲ層は南東部を中心とする近年の整地層である。なお、遺構は第Ⅱ層の整地層あるいは第Ⅳ層に掘り込まれて構築されている。覆土は褐灰色土を基本として第Ⅱ層に類似するが、粒径の細かな砂の混入が顕著である。

Ⅴ　遺構と遺物

概　観

開発地は、「宍戸城下絵図」によると３軒の武家屋敷地にあたっている。調査区は建物の基礎部分を中心として設定されたため開発地の北部分に偏在しており、屋敷地の全容は明らかとはできなかったが、屋敷地を区画するとみられる溝が確認されている。遺構が集中するのは北部分であり、間口を東にとり東西方向を主軸とする短冊型の地割が読み取れる。間口にあたる調査区東端では塀あるいは門などの遺構は認められていないものの、構築面に砂及び轍状の窪みが確認されたことと、この部分のみ石組が存在し、石組は人の目を意識した荘厳と解釈して小路を示すものと判断した。屋敷内からは、素掘りと石組の構造の違う２基の井戸跡が発見されている。屋敷地内では２棟の建物跡が調査され、２時期にわたる機能期間が明らかとなった。

検出された遺構は、17 世紀初頭から前半の建物跡２棟・溝跡 12 条・井戸跡４基・池跡２基・土坑 16 基・ピット 26 基で、少なくとも２時期の機能期間がある。遺物は 18 世紀代の資料が数点確認されるも、中心は遺構と同様に 17 世紀代初頭と前半に大別されるもので、その内訳は貿易陶磁（青磁蓮弁文盤、染付碗・皿）、瀬戸・美濃（天目茶碗、碗、香炉、擂鉢、志野丸皿・鉄絵皿・鉄絵向付、織部皿類）、唐津（鉄絵皿、鉢）、肥前系（染付碗・瓶）、常滑（甕、鉢）、土師質土器（小皿、内耳土鍋、土鍋）、瓦質土器（火鉢、擂鉢）、木製品（下駄、蓋、箸、柱）などである。このほか、縄文時代早期土器片、古代の土師器片が流路内より数点出土しており、周辺におけるこの時代の営みを示す資料とみられる。

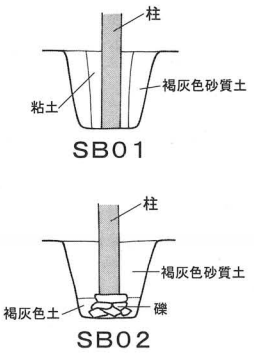
遺　構

建物跡・ピット（SB01・02、P01 ～ 26）

調査区北西部から近接して、方向を揃える SB01 と 02 の２棟の建物跡が確認された。

SB01 は、検出された部分を建物の規模及び屋敷地の範囲を考慮して棟行と仮定すると、８間の規模を有する大型の建物となる。P2 ～ 9・11・12 が身舎柱に相当し、P1 は形態的にやや小型であることから、縁あるいは庇を示すものと理解される。身舎柱の柱穴は長径 44 ～ 60 ㎝前後の円形で、P2・3・6・9・11 には柱が遺存していた。柱は 12 ㎝（４寸）角のクリを素材とする角柱で、平均的な柱間寸法は、1.95 m（6.5 尺）を基準としていた。柱の据え方は、模式図の通り柱の周りを粘土で固め、さらに粒径の粗い砂質土を充填することで固定している。なお P2 には柱が２本遺存しており、添柱あるいは建て替えが行われたとみられる。

SB02 は少なくとも４間の建物で、P1 ～ 6 が身舎柱と想定される。柱穴の形状は楕円形で、構造は、底面あるいは掘り込み深度の中程に拳大の礫を入れ、その上に扁平な礫を置き、柱を据えて粒径の細かな砂質土を充填する構造である。礎石建物に近いものの柱は柱穴の中に据えられ埋土されていることから掘立式礎石建築と呼ばれ、潮来市の堀之内大台城跡でも確認されている。柱間寸法の基準は SB01 と同じ 6.5 尺で京間の数値を示す。二者の前後関係につていは、建物構造の掘立から礎石建物への変遷を重視するならば、SB02 がより礎石建物に近い構造であることから新しいといえようが、SB01 と方向を併せた溝状の掘り込みが SB02 の P3 を壊していることや、建物の規模及び柱の残存を考慮すると SB02 が先行する可能性が高い。



柱穴模式図

ピットは 26 基が検出されている。SB01・02、SE01 に隣接する P01 からは拳大の礫を、P03 からは礫と丸柱とみられる柱が確認されるも調査区が狭小のため機能・構造は不明である。SB01・02 とは僅かに方向を異にし、構造の違いなどから別の建物と判断され、何等かな構造物が存在したものとみられる。ほかのピットについては覆土が砂・炭化粒を含む褐灰色土で占められていた。

溝　跡（SD01 ～ 12）

12条が確認されており、SD09を除く各溝は東西あるいは南北方向を基準として穿たれている。このうちSD02と06はほかの溝と比べ直線状に延びるしっかりとした掘り込みで、底面に粒径の細かな砂の堆積が認められることから滞水あるいは流水が想定でき、周辺には集中して遺物の出土が確認されている。千葉県に所在する佐倉城跡の武家屋敷の調査では、屋敷境に低い土手を用いる区画を主体とするが、50㎝ほどの浅い溝を穿つ場合もあり、比較的屋敷境に遺物が多く分布している。これらを併せ考えて、SD02と06については屋敷境を示す遺構と判断した。SD02は調査区の東端に位置し、C・D区に溝の一部と想定される覆土を同じくした掘り込みが認められ、SD02の延長上に位置することから、西に直線状に延びてSD08に接続する可能性が高い。また、溝の側面には径20㎝前後の杭跡が認められており、土留めのための痕跡とみられる。さらに、東端部分では溝内に長計20 ～ 70㎝、短計15 ～ 40㎝、厚さ10 ～ 18㎝の礫を用いた石組が5ｍにわたり確認されている。この石組は排水路と考えられ、SG02に接続するとみられるが、崩れているため規模形状は不明である。東端では砂の散布が認められ、絵図には現在の水路に沿って小路が描かれていることを考えると、小路に面した部分のみ礫で荘厳された可能性を指摘できる。SD07・12についても同一遺構で東西に直線状に延びる溝の東と西端が検出された可能性もある。このほかについては比較的掘り込みが浅い遺構であった。

井戸跡（SE01 ～ 04）

井戸はSD02で区画されたとみられる北側の空間から石組で構築されたSE01と素掘りのSE02が、SD06により区画された東側の空間からSE03と04の素掘りの２基が検出されている。

SE01は長計2.60ｍ、短計2.58ｍの漏斗形に近い掘り方を伴い、石組により構築されている。石組の内径は85㎝前後で主要な構材には、長計32 ～ 50㎝、短計27 ～ 42㎝、厚さ10 ～ 15㎝のチャート・ホルンフェルス？・片岩類を用い、拳大の小礫を裏込めとしていた。駿府城三の丸跡をはじめとした近世城郭からは、石組井戸の底に木製の井戸枠の検出が認められているが、本遺構では1.10ｍの深度までしか調査しておらず水溜の状況は不明である。覆土は砂・炭化材・焼土・粘土ブロックを多量に含んだ褐灰色土で、上面は粘土により閉塞されていた。SE02 ～ 04については、円筒形を呈する素掘りの井戸で、井戸枠及び井側は確認されていない。SE03と04については、同一の屋敷内から検出されており、枯渇による掘り変えとは考えづらいが同一形態から機能の分化とはみられず、むしろ時間差の可能性が指摘される。SE02の覆土は腐食質の黒褐色土で上面はSE01と同様に粘土で覆われていた。SE03・04の覆土は砂・炭化粒を含む褐灰色土である。

池　跡（SG01・02）

２基が検出されている。SG01は本体部分の南に位置し流路の延長上にある。おそらく流路を利用して造られたと推測され、排水用の水溜としての機能を具備していたとみられる。平面形態は南北に長い長楕円形を採る可能性が高い。遺物は瀬戸・美濃焼の擂鉢、唐津焼鉢、貿易陶磁の可能性のある染付碗、土師質の内耳土鍋、瓦質土器の火鉢・擂鉢、下駄などである。SG02は、本体部分の東に位置し、SD02に接続する。調査当初遺物の出土がみられず植栽の痕跡とも考えたが、楕円形の掘り込みと規模、さらに覆土の褐灰色土は、砂利・植物遺体の含有が顕著なことから一応池跡としておく。なお、SG01の覆土は02と同様であった。

土　坑（SK01 ～ 16）

土坑は16基が検出され、本体部分の北東に集中している。いずれも掘り込みは浅く、断面形状は皿状である。SK03からは箸・蓋などの木製品が出土しており、SE02との関係が示唆される。このほか土坑からの遺物は少量で、機能についてはゴミ溜としての様相はうかがわれず、桶あるいは木枠などが据えられた痕跡も捉えられていない。総じて要途については不明である。覆土は全体に砂を含有した褐灰色土であった。

第1表　遺構一覧表

建物跡（ＳＢ）

単位(cm)

番号	位置	規模			備考
SB01	本体北西	1540×190以上（8間×2間以上） 方向 N－75°－W			SB02と重複し東端に小溝を伴うとみられる。掘立柱建物。
	柱穴	平面形態	長径×短径×深	覆土	柱間寸法・その他
	P1	円形	38×34×36	暗褐色土主体。上部砂質土。	P1・2間は70。縁束あるいは庇を示すものか？。
	P2	円形	44×38×44	暗褐色土覆う。	P2・3間は200。角柱2本遺存。建て替えあるいは添柱の痕跡か。
	P3	円形	54×53×41	模式図と同じ。	P3・4間は195。角柱遺存。
	P4	円形	52×46×60	褐灰色砂質土主体。	P4・5間は190。
	P5	楕円形	79×51×50	褐灰色砂質土主体。	P5・6間は195。
	P6	円形	54×52×42	模式図と同じ。	P6・7間は175？。角柱遺存。
	P7	円形	49×49×50	褐灰色砂質土主体。	P7・8間は195？。
	P8	円形	45×43×54	褐灰色砂質土主体。	P8・9間は195？。
	P9	楕円形	47×39×44	模式図と同じ。	P9・10間は115。角柱遺存。P9・11は間は195。
	P10	円形	24×22×45	褐灰色砂質土主体。	P10・11間は80。束柱か。
	P11	楕円形	56×48×39	模式図と同じ。	P11・12間は160。角方柱遺存。
	P12	円形	53×47×40	褐灰色砂質土。	
	P13	円形	39×36×36	褐灰色砂質土。	縁束あるいは庇を示すものか？。
番号	位置	規模			備考
SB02	本体北西	840×140以上(4間×2間以上) 方向 N－77°－W			SB01と重複。柱穴内より礫が確認される。掘立式礎石建物。
	柱穴	平面形態	長径×短径×深	覆土	中間寸法・その他
	P1	長楕円形	79×64×50	褐灰色砂質土。	P1・2間は195？。柱穴内に礫。
	P2	楕円形	90×56×48	褐灰色砂質土。	P2・3間は255？。
	P3	楕円形	112×65×24	褐灰色砂質土。	P3・4間は195。柱穴内に礫。
	P4	楕円形	92×77×29	褐灰色砂質土。	P4・5間は195。柱穴内に礫。
	P5	楕円形	104×74×44	褐灰色砂質土。	P1・6間は90。柱穴内に礫。
	P6	円形	54×50×41	褐灰色砂質土。	柱穴内に礫。

ピット（Ｐ）

番号	位置	平面形態	長径×短径×深	覆土	備考
P01	A区	円形	47×45×41	褐灰色土。砂・炭化粒含。	ピット内に礫。P02と組まれるか。
P02	A区	円形	50×48×38	褐灰色土。砂・炭化粒含。	P01と組まれるか。
P03	A区	円形	37×33×29	褐灰色土。砂・炭化粒含。	丸柱遺存(クリ)。SE01に近接。
P04	B区	円形	56×54×21	褐灰色土。砂・炭化粒含。	SD01に近接。
P05	B区	楕円形	82×55×21	褐灰色土。砂・炭化粒含。	2段に掘り込まれる。SD01に近接。
P06	C区	円形ヵ	38×33以上×18	褐灰色土。砂含。	SK02と重複し古い。
P07	C区	円形ヵ	51×32以上×12	褐灰色土。砂含。	SK02と重複し古い。
P08	D区	円形	35×33×12	褐灰色土。砂・炭化粒含。	SE02に近接。
P09	D区	円形	53×52×5	褐灰色土。砂・炭化粒含。	SE02に近接。
P10	D区	円形	35×34×8	褐灰色土。砂・炭化粒含。	SE02に近接。
P11	本体南西	円形	38×35×24	褐灰色土。砂・炭化粒含。	P12・13に近接。
P12	本体南西	円形	48×46×6	褐灰色土。砂・炭化粒含。	P11・13に近接。
P13	本体南西	円形	37×36×8	褐灰色土。砂・炭化粒含。	礫検出。P11・12に近接。
P14	本体南西	楕円形	52×31×19	褐灰色土。砂・炭化粒含。	
P15	本体南	円形	42×41×8	褐灰色土。砂・炭化粒含。	SE03に近接。
P16	本体南	円形	41×37×9	褐灰色土。砂・炭化粒含。	SE04に近接。
P17	本体南	楕円形	58×42×17	褐灰色土。砂・炭化粒含。	SE04に近接。
P18	本体北	楕円形	48×37×16	褐灰色土。砂含。	大型。
P19	本体北東	楕円形	46×37×16	褐灰色土。砂含。	
P20	本体北東	円形	58×54×14	褐灰色土。砂含。	大型。
P21	本体北東	楕円形	43×35×28	褐灰色土。砂含。	
P22	F区	円形	45×43×16	褐灰色土。砂含。	
P23	本体北西	円形	32×25以上×31	褐灰色砂質土。	SB01の一部か。

ピット（P）

単位(cm)

番号	位置	平面形態	長径×短径×深	覆土	備考
P24	本体北	円形	39×34以上×16	褐灰色砂質土。	礫検出。SB01・02と近接。
P25	本体北	円形ヵ	26×19×10	褐灰色砂質土。	SB01・02と近接。
P26	本体北	楕円形	56×46×10	褐灰色土。砂含。	SB01・02と近接。SB02の縁束あるいは庇を示すものか。

溝（SD）

番号	位置	断面形状	全長×幅×深	方向	備考
SD01	B区	箱形	485以上×139～169×27	N－15°・110°－E	L字状に屈曲する。覆土は褐灰色土。砂・黒色粘土ブロック含。
SD02	本体中央	箱形	2790以上×183～294×66	N－70°－W	東端から5mにわたり石組。SD08と同一とみられる。覆土は褐灰色土。
SD03	本体南西	箱形	398以上×53×6	N－20°－E	覆土は褐灰色砂質土。砂・炭化粒密。SD04と併走。
SD04	本体南西	箱形	554以上×60～83×5	N－20°－E	覆土は褐灰色砂質土。砂・炭化粒密。SD03と併走。
SD05	本体南西	箱形	565以上×30×4	N－20°－E	覆土は褐灰色砂質土。砂・炭化粒密。
SD06	本体南西	箱形	730以上×95×33	N－20°－E	屋敷割の区画溝とみられる。覆土は褐灰色砂質土を主体とする。
SD07	本体西	箱形	153×84以上×25	N－70°－W	SD12と同一とみられる。覆土は褐灰色砂質土。SD08と併走。
SD08	本体西	箱形	251×80以上×32	N－70°－W	SD02と同一とみられる。覆土は褐灰色砂質土。SD07と併走。
SD09	本体北西	箱形	470以上×33～175×7	N－30°・110°－W	L字状に屈曲する。本遺構のみ軸線を異にする。覆土は褐灰色砂質土。
SD10	本体北東	箱形	235以上×153×32	N－15°－E	覆土は褐灰色土。上層に砂・黄褐色粘土ブロック含。
SD11	本体南	箱形	556以上×32×9	N－15°－E	覆土は褐灰色砂質土。砂・炭化粒密。
SD12	本体中央	皿状	223×191以上×34	N－70°－W	SD07と同一とみられる。覆土は褐灰色土。砂・炭化粒多量。

井戸（SE）

番号	位置	平面形態	長径×短径×深	方向	備考
SE01	A区	円形	260×258×110以上	N－54°－E	内径85cm前後の石組。覆土は褐灰色土。上部を粘土で閉塞。
SE02	D区	楕円形	137×127×110以上	N－5°－E	断面形状は円筒形。覆土は黒褐色土。砂・炭化材・粘土ブロック含。
SE03	本体南	円形	82×81×100以上	N－37°－W	断面形状は円筒形。覆土は褐灰色土。砂・炭化粒含。
SE04	本体南	楕円形	100×89以上×80以上	N－6°－W	断面形状は円筒形。覆土は褐灰色土。砂・炭化粒含。

池（SG）

番号	位置	平面形態	長計×短計×深	方向	備考
SG01	本体南	長楕円形ヵ	400以上×272×70	N－63°－E	流跡上に位置するとみられる。覆土は褐灰色土。砂利・植物遺体含。
SG02	本体東	楕円形	311×194以上×42	N－75°－W	SD02と接続。覆土は褐灰色土。砂利・植物遺体含。

土坑（SK）

番号	位置	平面形態	長計×短計×深	方向	備考
SK01	A区	楕円形ヵ	142×130以上×18	N－70°－W	SE01と近接。覆土は褐灰色土。人為堆積か。出土遺物なし。
SK02	C区	楕円形	186×124×26	N－24°－E	P06・07と重複し新しい。覆土は褐灰色土。自然堆積。
SK03	D区	楕円形	113×71×20	N－63°－E	SK16と重複し新しい。SE02と近接。覆土は褐灰色土。木製品出土。
SK04	本体北	円形	117×107×34	N－37°－W	覆土は褐灰色土を基本。人為堆積か。
SK05	本体南西	方形	120×70×18	N－69°－W	径17cmの小ピット有。覆土は褐灰色砂質土。自然堆積。
SK06	本体北	楕円形	135×118以上×21	N－78°－E	SB01・02と近接。覆土は褐灰色土。人為堆積か。出土遺物なし。
SK07	本体北東	方形	100以上×84×20	N－6°－E	覆土は褐灰色土。人為堆積か。出土遺物なし。
SK08	本体北東	楕円形ヵ	117×111×13	N－72°－E	覆土は褐灰色土。人為堆積か。出土遺物なし。
SK09	本体北東	方形ヵ	110×87×15	N－13°－E	覆土は褐灰色土。人為堆積か。出土遺物なし。
SK10	本体北東	方形	102×77×13	N－13°－E	覆土は褐灰色土。自然堆積か。出土遺物なし。
SK11	本体北東	方形ヵ	76×72×17	N－20°－E	覆土は褐灰色土。人為堆積か。出土遺物なし。
SK12	本体北	楕円形	154×129以上×15	N－78°－E	覆土は2層に分層。褐灰色土。自然堆積。出土遺物なし。
SK13	本体北東	楕円形	163×161以上×30	N－34°－W	覆土は褐灰色土。自然堆積。出土遺物なし。
SK14	本体北東	楕円形	131×49以上×27	N－68°－W	覆土は褐灰色土。自然堆積。出土遺物なし。
SK15	E区	円形	125×122×39	N－0°	覆土は褐灰色土。自然堆積。出土遺物なし。
SK16	D区	楕円形ヵ	70×70×18	N－2°－W	SK03と重複し古い。覆土は褐灰色土。人為堆積か。出土遺物なし。

遺　物

遺物の出土状況を概観すると、溝跡内が過半数近くを占め井戸跡・池跡と続き、総じて土坑からの出土量は少ない。また、表採資料は調査区外に設定した排水溝の掘削時に得られたもので、A・B区の南部分に集中している。遺物の時期は17世紀初頭と前半でその内訳は、貿易陶磁、国産陶磁、土器、木製品に大別され、大多数を占める陶磁器及び土器類については、接合後の破片数を表に集計した。

これによると貿易陶磁で確実な遺物は全体の３％と少ないものの、威信財として伝世したとみられる青磁蓮弁文盤や、守護あるいは有力国人の居城などで出土している染付皿Ｆ群（鍔皿）が確認される。国産陶磁器では、瀬戸・美濃焼が 22 ％、唐津焼３％、常滑焼３％で、確実な肥前系磁器は３％である。多数を占める瀬戸・美濃焼の中では志野が約1/3を占め、中でもSD02-1の型打ちの鉄絵向付は規格品で、大坂城三の丸跡から法量をほぼ同じくする類似品が出土し、豊臣後期にあてられている。大坂の調査では16世紀末から17世紀初頭に志野などの美濃焼と唐津焼が増加する。常総地域では、小張城・守谷城・土浦城などの調査でこの時期に志野と唐津製品の急速な増加が認められ、大坂における豊臣後期と同様な組成を示している。本調査では唐津製品は少ないものの平成16年度調査を併せると相当数の唐津焼の保有は明らかである。この後全国的には1640年代を境に志野が減少し、伊万里焼が青花に取って代わるなど肥前磁器の卓越が指摘されているが、平成16年度調査では青花は多いものの肥前系磁器の出土量は少なく、本調査でも同様の傾向がうかがわれる。このことは当地におけるこの画期が宍戸城廃城以降にあったことを暗示するものであろう。

土師質土器及び瓦質土器は出土遺物の過半数を占め、数量では土師質土器の小皿（かわらけ）・内耳土鍋を主体としており、小皿の出土は中世的な儀礼空間を、土鍋類は生活域を物語っている。なお、これらは在地産の製品で占められていた。木製品は、下駄・箸・蓋・建築部材を中心とし、用途不明の遺物もみられる。このうち樹種同定を行った６点については、製品による樹種の選定が明らかとなっている。

第2表　出土陶磁器・土器集計表

種別	器種	SB01	SB02	P05	P09	SD02	SD03	SD04	SD05	SD06	SD08	SD09	SE01	SE02	SE03	SE04	SG01	SK02	SK04	SK05	表採	計
貿易陶磁	青磁蓮弁文盤											1										1
	染付碗												1				2?					3
	染付皿													1								1
瀬戸・美濃	天目茶碗												1								2	3
	碗						1?															1
	香炉																				1	1
	擂鉢																1				1	2
	志野丸皿・皿類			1		1			1													3
	志野鉄絵皿																				1	1
	志野鉄絵向付・向付					1												1?				2
	織部皿類																				1	1
	不明		1																		5	6
唐津	鉄絵皿				1																	1
	鉢類							1									1					2
肥前系	染付碗																				2	2
	染付瓶											1										1
常滑	甕										1							1				2
	鉢																				1	1
産地不明	染付碗												1								1	2
	鉢類					1																1
	不明						1														1	2
土師質土器	小皿		1			3	1	3			2	2			2	1		1	1	1	5	23
	内耳土鍋・土鍋類					2			1				1				1					5
	不明	2					6	3		1	1				1			1			6	21
瓦質土器	火鉢					1											3					4
	擂鉢																1					1
計		2	2	1	1	9	9	7	2	1	4	4	4	1	3	1	9	4	1	1	27	93

第3表　出土遺物観察表

単位(cm)

遺構番号	遺物番号	種類 器種	器高 口径 底径	技法・その他	胎土	色調	焼成	備考
SB01	1	木製品 柱	全長〈15.0〉　幅12.0×12.0 角柱。底面は平坦。木取りは芯をはずす。					P6
SB01	2	木製品 柱	全長〈18.0〉　幅12.0×11.0　材質:クリ 角柱。底面は平坦。木取りは芯をはずす。					P3
P03	1	木製品 柱	長さ〈24.0〉　長径14.0　短径12.5　材質:クリ 丸柱。根近くの芯持丸材を素材とし、刃痕が確認される。					
P09	1	唐津 鉄絵皿	〈4.5〉 － －	体部片。内面に鉄絵付を行う。草花文を描いたものか？	石英 密度をもつ	茶褐色	良	
SD02	1	美濃 志野鉄絵向付	7.1 (11.4) (8.0)	1/3存。ロクロ成形後型打ちされ、入隅四方形に整えられた角向付。側面には檜垣をあしらい全面に長石釉を施す。鉄絵の発色は薄い。底部は削り込みの碁笥底高台で見込みに目跡が認められる。久尻系の窯か？。17世紀前半。	白色粒	淡黄白色	良好	D区
SD02	2	美濃 志野丸皿	〈2.7〉 (10.0) －	口縁部片。全面に長石釉が施される。17世紀前半。	白色粒	黄白色	良	D区
SD02	3	土師質土器 小皿	〈3.3〉 (9.6) (5.7)	1/5存。ロクロ成形。	長石・石英・ 雲母	灰褐色	良	D区
SD02	4	土師質土器 小皿	〈3.2〉 (11.6) －	口縁部片。ロクロ成形。	長石・石英・ 雲母	橙色	良	D区
SD02	5	土師質土器 内耳土鍋	11.4 (35.0) (28.0)	口縁部～底部片。外面に煤付着する。	長石・石英・ 雲母	内面:灰褐色 外面:黒褐色	良	D区
SD02	6	鉢類	〈5.0〉 － －	体部下端片。下端ヘラ削り。内外面に灰釉を施す。産地不明。	白色粒	灰白色	良	D区
SD03	1	瀬戸・美濃？ 碗	〈3.2〉 － －	体部片。腰部に丸味をもつとみられる。下端にヘラ削りを施し、腰部を除きよく溶けた鉄釉が認められる。瀬戸・美濃の一部の可能性があるも不明。	白色粒 しっかりとしている	茶褐色	良	
SD05	1	美濃 志野皿	〈2.5〉 (12.4) －	口縁部片。端反皿で体部下端はヘラ削り、下端以外は長石釉を施し、無地志野とみられる。大窯4期末。17世紀初頭。	白色粒	灰白色	良	
SD05	2	土師質土器 内耳土鍋	〈5.7〉 (28.0) －	口縁部片。外面に煤が付着し、耳は擦れて使い込まれる。	長石・石英・ 雲母多量	内面:灰褐色 外面:黒褐色	良	
SD08	1	土師質土器 小皿	〈3.3〉 (10.0) (4.5)	体部片。ロクロ成形。やや丸味をもつ。	長石・石英・ 雲母	灰褐色	良	
SD08	2	常滑 甕	〈7.0〉 － －	胴部片。15世紀以降。	大粒の白色 粒・石英多量	暗赤灰色	良	
SD09	1	貿易陶磁 青磁蓮弁文盤	〈2.8〉 (25.0) －	口縁部片。外面に蓮弁文が確認される。龍泉窯系。13世紀代。伝世品か。	生目細かい	明緑灰色	良	
SD09	2	肥前系 染付瓶	〈2.1〉 － －	肩部片。頸は細い。	生目細かい	明青灰色	良	
SD09	3	土師質土器 小皿	1.8 6.2 3.7	ほぼ完形。体部はロクロ撫で。	長石・石英・ 雲母	明褐色	良	
SE01	1	瀬戸・美濃 天目茶碗	〈3.5〉 － －	体部片。鉄釉。大窯4期後半。1600年前後。	白色粒	茶褐色	良好	上層中
SE01	2	貿易陶磁 染付碗	〈2.8〉 － －	体部片。染付碗E群。16世紀末。	気泡入る	灰白色	良	上層中
SE01	3	土師質土器 土鍋類	〈9.5〉 － 14.0	体部～底部。内外面撫で。下端ヘラ削り。内外面煤の付着が顕著で良く使い込まれる。小型で茶の湯に使用されたものか。	長石・石英・ 雲母	灰褐色	良	上層中
SE02	1	貿易陶磁 染付皿	〈3.2〉 － (10.0)	体部～底部片。形態は鍔皿で染付皿F群。高台端に砂の付着が確認される。16世紀末～17世紀。	生目細かい	灰白色	良好	上層中
SE02	2	木製品 下駄	全長6.8　幅8.2　高2.4　台厚1.2　前歯幅3.4　前歯高　2.3　後歯幅3.2　後歯高1.6　前壺径1.2　横緒孔径1.5 材質:モクレン属。ほぼ完形。連歯下駄で眼が3ヶ所確認され、横緒孔は後歯前方である。征目取り。					上層中
SE02	3	木製品 不明品	全長〈25.3〉　幅〈4.3〉　厚　0.4 蓋類を再利用し、ヘラ状に再加工したものか。征目取り。					上層中

単位(cm)

遺構番号	遺物番号	種類 器種	器高 口径 底径	技法・その他	胎土	色調	焼成	備考
SE04	1	土師質土器 小皿	〈2.1〉 (10.4) –	体部片。ロクロ成形。	長石・石英・雲母	明褐色	良好	上層中
SG01	1	染付碗	〈2.7〉 – –	口縁部片。明末～清初の舶載品の可能性がある。	緻密	白色	良好	3層中
SG01	2	染付碗	〈4.6〉 – –	体部片。釉薬を掛けた後「孝子」の文字を削り描く。明末～清初の舶載品の可能性がある。	細かい気泡が入る	灰白色	良好	3層中
SG01	3	唐津 鉢	〈5.8〉 – –	体部片。僅かに灰釉の痕跡を残し、内面に目跡が残る。外面下端はヘラ削り。	白色粒・石英密度をもつ	茶褐色	良	3層中
SG01	4	瓦質土器 火鉢	〈10.5〉 (22.5) –	体部片。下部にスタンプにより文様をあしらう。内面ナデ。	長石・石英・雲母	黒褐色	良	3層中
SG01	5	瓦質土器 火鉢	〈15.3〉 (27.0) –	体部片。下半にスタンプにより菊花文をあしらう。	大粒の長石・石英・雲母	暗灰色	良	3層中
SG01	6	瓦質土器 火鉢	5.6 (23.8) (21.0)	1/5存。内外面磨き。	長石・石英・雲母・白色針状物質	暗灰色	良	3層中
SG01	7	瀬戸・美濃 擂鉢	〈10.6〉 (28.2) –	口縁部～体部片。擂目は細かく内外面共に施釉。擂鉢Ⅰ類。大窯4期末～登窯1期。17世期初頭。	大粒の石英・白色粒	茶褐色	不良	3層中
SG01	8	土師質土器 内耳土鍋	〈7.0〉 – –	口縁部。外面煤付着。	長石・石英・雲母・白色針状物質	内面:褐灰色 外面:黒褐色	良	3層中
SG01	9	木製品 下駄	全長 21.6　幅〈10.2〉　高〈4.3〉　台厚 2.0　前歯幅〈3.2〉　前歯高〈1.4〉　後歯幅 3.6　後歯高2.2　前壺2.1×1.9 横緒孔2.3×2.3　材質:マツ属複維管束亜属 一部欠損。角型の連歯下駄で眼が3ヶ所確認され、横緒孔は後歯前方である。征目取り。					3層中
SG01	10	木製品 不明品	全長〈6.8〉　幅8.1　高6.3　材質:カツラ 割れ口が判然としないが、連歯下駄の一部か。前壺が認められないことから後歯の可能性もあるが、台厚が薄いため不明品としておく。征目取り。					3層中
SK02	1	美濃 志野向付？	〈2.5〉 – –	体部片。内外面長石釉。	白色粒	灰白色	良	
SK02	2	常滑 甕	〈8.4〉 – –	胴部片。15世紀以降。	大粒の長石・石英	暗紫灰色	良	
SK03	1	木製品 箸	全長 24.0　最大幅 0.7　厚さ 0.6 完形。白木。両端が細くなり断面が八角形状。					
SK03	2	木製品 蓋？	全長〈29.0〉　幅〈7.3〉　厚さ 0.8 1/5存。木取りは征目で径を違えて仕上げる。木釘口などは認められない。					
SK03	3	木製品 不明品	全長〈22.8〉　幅〈6.3〉　厚さ2.0　材質:マツ属複維管束亜属 外面は面取りがなされ多角形状である。内面は円滑であることから中空で機能したものか。木樋としては小型である。					
SK04	1	土師質土器 小皿	1.6 (6.1) (3.2)	体部～底部片。ロクロ成形。	長石・石英・雲母	明褐色	良	
表採	1	瀬戸・美濃？ 碗	〈3.7〉 (10.8) –	口縁部片。形状は天目茶碗。釉は鉄釉あるいは飴釉。瀬戸・美濃の一部の可能性があるも不明。	白色粒しっかりしている	オリーブ黒	良	
表採	2	美濃 織部皿類	〈2.0〉 – –	口縁部片。内外面に銅緑釉を施した青織部の皿あるいは向付か。内面に3条の横線が認められ、ロクロ回転による沈線とみられる。	灰白色	オリーブ色	良	
表採	3	肥前系 染付碗	〈4.7〉 – 4.5	底部片。体部外面に絵付の痕跡が確認される。見込みが気泡によりふくれ、石はぜが認められる。	白色粒	灰色	良	
表採	4	美濃 志野鉄絵皿	〈1.6〉 – 6.2	底部片。体部下端及び高台はロクロ撫で。内面に鉄絵によりすすきのような草花をあしらう。穂の向きには風を感じる。	白色粒	灰白色	良好	
表採	5	瀬戸・美濃 香炉	7.0 (13.4) (11.4)	1/2存。体部は円筒形を基本とするが、下端がややふくらみ袴腰状となる。底部及び体部下端はヘラ削りで、底部には粘土塊を貼付けた足が3ヶ所存在するとみられ、指紋が残る。内外面には鉄釉が施される。	白色粒 気泡入る	内面:明褐色 外面:茶褐色	良	
表採	6	不明	〈3.4〉 – (11.4)	底部片。底部には焼成前に穿孔がなされ、体部にも透かし孔が確認される。底部露胎。産地・器種共に不明。	白色粒 ザックリとしている	褐灰色	良好	
表採	7	瀬戸・美濃 擂鉢	〈3.1〉 (29.0) –	口縁部片。内外面共に施釉。18世紀後半。	白色粒 気泡入る	茶褐色	良	

Ⅵ　出土した木製品の樹種

はじめに

茨城県笠間市宍戸城跡は、涸沼川左岸の沖積地に位置する。今回の発掘調査により、17世紀初頭から前半の井戸、柱穴、土坑等の遺構が検出されている。これらの遺構からは、柱材等の建築部材や下駄などの木製品が出土している。今回は、17世紀初頭から前半の木材利用を明らかにするため、出土した木製品の樹種同定を実施する。

1．試料

試料は、出土した木製品6点（試料番号1-6）である。

2．分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し（図版8）、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3．結果

樹種同定結果を樹種同定結果表に示す。木製品は針葉樹1種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹3種類（クリ・モクレン属・カツラ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen.　*Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb.　et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・モクレン属（*Magnolia*）　モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2-4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-40細胞高。

・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb.　et Zucc.）　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-30細胞高。

4．考察

樹種同定を実施した木製品は、下駄、柱、部材、不明品である。これらの木製品には針葉樹１種類と広葉樹３種類が認められた。針葉樹の複維管束亜属は、いわゆるニヨウマツ類であり、木材は比較的強度や保存性が高いが加工は容易である。広葉樹のクリは、重硬で強度および耐朽性が高いが、加工はやや困難な部類に入る。モクレン属とカツラは比較的重硬であるが、散孔材で材質が比較的均質で加工は容易である。

器種別にみると、柱は角柱・丸柱ともクリであり、強度や耐朽性の高い木材を選択していることが推定される。下駄は、モクレン属と複維管束亜属であるが、モクレン属には下駄によく利用されるホオノキが含まれる。いずれも同時期の下駄材として出土例がある樹種である。

なお、不明品にはカツラ、部材には複維管束亜属が利用されている。

宍戸城跡では、これまでにも17世紀前半と17世紀中頃の遺構から出土した木製品について樹種同定が実施されている（能城、2006）。その結果をみると、全体ではヒノキを中心とした針葉樹材の利用が多い傾向がある。器種別にみると、柱材にはクリとアカマツ、連歯下駄はカツラと複維管束亜属、漆器椀はブナ属とトチノキが利用され、製品によって利用樹種が異なる。今回の同定結果も、製品により利用樹種が異なるという当時の用材傾向の一端をよく示す資料となったといえよう。

樹種同定結果表

番号	遺構	年代	器種	樹種	遺物実測図番号
1	SE02	17世紀初頭～前半	下駄	モクレン属	ＳＥ02-2
2	SG01	17世紀初頭～前半	下駄	マツ属複維管束亜属	ＳＧ01-9
3	SG01	17世紀初頭～前半	不明品	カツラ	ＳＧ01-10
4	SB01P3	17世紀初頭～前半	柱（角柱）	クリ	ＳＢ01-2
5	P03	17世紀初頭～前半	柱（丸柱）	クリ	Ｐ03-1
6	SK03	17世紀初頭～前半	不明品（部材）	マツ属複維管束亜属	ＳＫ03-3

引用文献

林　昭三　1991　日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所

伊東　隆夫　1995　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料、31、京都大学木質科学研究所．81-181

伊東　隆夫　1996　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料、32、京都大学木質科学研究所．66-176

伊東　隆夫　1997　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料、33、京都大学木質科学研究所．83-201

伊東　隆夫　1998　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料、34、京都大学木質科学研究所．30-166

伊東　隆夫　1999　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料、35、京都大学木質科学研究所．47-216

能城　修一　2006　宍戸城跡出土木製品の樹種．「茨城県教育財団文化財調査報告第256集　新善光寺跡・宍戸城跡　主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」、茨城県水戸土木事務所・財団法人茨城県教育財団．159-160

Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.（編）2006　針葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修）、海青社、70p

島地　謙・伊東　隆夫　1982　図説木材組織．地球社．176p

Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.（編）1998　広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修）、海青社．122p.［Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］

Ⅶ 総 括

調査は、慶長７年（1602）から正保２年（1645）までの43年間、秋田氏５万石の中心地であった宍戸城の外郭部に位置する武家屋敷跡に対して実施された。宍戸城は小規模盆地内に築かれた平城で、微高地に主郭を置きながら、沖積地は主に家臣団の屋敷地にあてられていた。築城前の盆地内には小沢が流れていたようで、調査では流路が確認されており、これを盛土整地しての屋敷普請が明らかとなっている。

開発地を正保年間に作成された「宍戸城下絵図」に対比させると、この地区は100～200石の秋田家中における比較的上級家臣の居住空間となっており、開発地の北部分は東西方向を主軸とし間口を東にとる坂田権之助の屋敷地で、その南は、南に間口をとる２軒の屋敷地に分割されていた。東側は秋田半太夫、西側は岑源右衛門の屋敷である。このため屋敷境はＴ字状となり、調査ではこの部分に直線状に延びるしっかりとした掘り込みのSD02とSD06が確認され、絵図と合致する屋敷割と判断した。この周辺には遺物の出土が比較的多く認められることからも屋敷境を示すものと理解される。調査区は開発地内の北部分に偏在して設定されたため、大半は200石の家禄を有する坂田権之助の屋敷地にあたっているが、敷地の1/2以上は北の調査区外に存在している。絵図では調査区の東端で、水路沿いに南北方向に延びる通りの記載があり、調査では遺構確認面から砂が検出され、さらに石組を伴う溝が発見されたことで通りの痕跡を示すものと理解した。平成16年度の茨城県教育財団の調査では、通りに面して門及び塀跡などが確認されているが、今回は調査地が狭小であったためかこの種の遺構検出には至っていない。ただ、南の屋敷境となるSD02は、東端の５ｍ分だけ石組が確認され、通りに面した部分にのみ石組で荘厳されていたとみることができる。

坂田家における屋敷地内の空間構成をみると、入り口付近には素掘りのSE02と奥にあたる西端に石組のSE01が位置し、その北に２時期にわたる大型建物のSB01と02が展開している。井戸については調査地一帯が湧水に恵まれていることから、枯渇による掘り直しとは考えづらく、時期の前後関係よりも機能の分化を示す事例といえる。坂田家は200石の家禄を食む馬上の士であることから馬の飼育がうかがわれ、厩は検出されていないが、入り口近くに設けられるのが一般的であり、その場合入り口近くに位置するSE02は馬の飼育をはじめとする生活雑水を供給した可能性が高い。一方、石組のSE01は、近接して大型の建物跡が展開することや茶陶の出土から、より公的な、いわゆる〝ハレ〟の空間で使用されたと考えられる。平成16年度の調査においては、屋敷地の前庭型構造を指摘しているが、今回も同様な成果を得ており、近世初頭における武家屋敷の空間構成をおぼろげながらうかがうことができた。

出土遺物では、志野鉄絵向付や貿易陶磁などの優品をはじめとして茶陶の出土が目立っている。藩主秋田実季は高い教養をもつ人物とされており、茶の湯にもすぐれ、この影響で秋田家中では茶の湯が盛んであったと伝えられている。出土した茶陶は近世初頭における200石の経済力や、これをうかがい知ることのできる資料ではあるが、「侘茶」から「武家茶」に遷り変るこの時期にあって、天目茶碗が主体となることや土師質土器小皿の比率の高さを考えると、未だ中世的な様相を残す17世紀初頭から前半代の東国武士の生活を示しているといえよう。

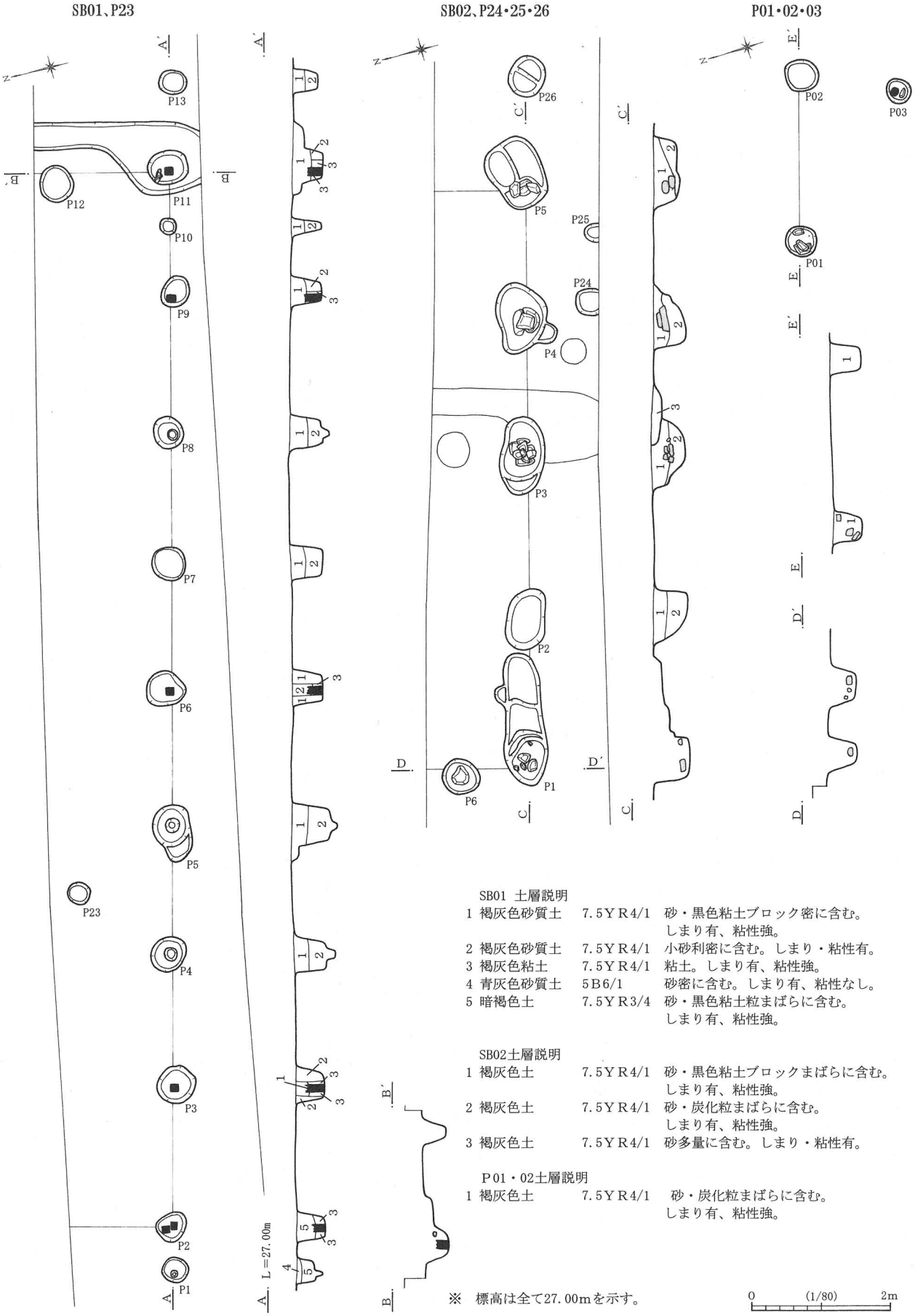
引用・参考文献　茨城県水戸土木事務所　（財）茨城教育財団　2006『新善光寺跡　宍戸城跡　主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第256集

鹿島神社遺跡調査会　伊奈町教育委員会　2006『鹿島神社遺跡（小張城跡）－町道1560号線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

友部町立歴史民俗資料館　2003『江戸時代の友部地方・宍戸藩－秋田氏と松平氏－』平成15年度友部町立歴史民俗資料館特別展図録

友部町　友部町商工会　1971『友部町百年史』

図面1（遺構）



SB01 土層説明

1	褐灰色砂質土	7.5YR4/1	砂・黒色粘土ブロック密に含む。しまり有、粘性強。
2	褐灰色砂質土	7.5YR4/1	小砂利密に含む。しまり・粘性有。
3	褐灰色粘土	7.5YR4/1	粘土。しまり有、粘性強。
4	青灰色砂質土	5B6/1	砂密に含む。しまり有、粘性なし。
5	暗褐色土	7.5YR3/4	砂・黒色粘土粒まばらに含む。しまり有、粘性強。

SB02土層説明

1	褐灰色土	7.5YR4/1	砂・黒色粘土ブロックまばらに含む。しまり有、粘性強。
2	褐灰色土	7.5YR4/1	砂・炭化粒まばらに含む。しまり有、粘性強。
3	褐灰色土	7.5YR4/1	砂多量に含む。しまり・粘性有。

P01・02土層説明

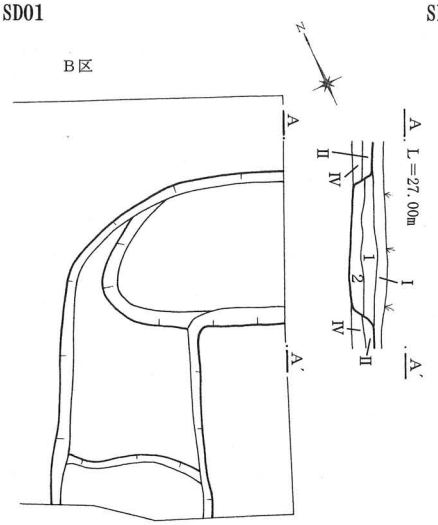
1	褐灰色土	7.5YR4/1	砂・炭化粒まばらに含む。しまり有、粘性強。

※　標高は全て27.00mを示す。

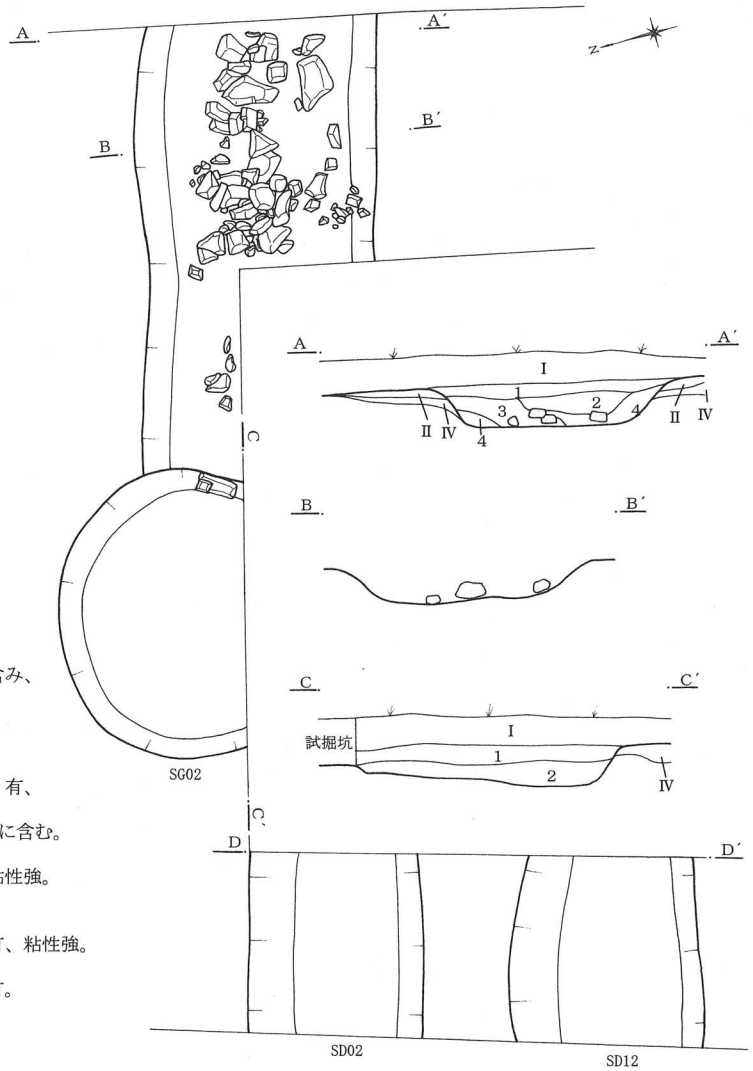
0　(1/80)　2m

SB01・02、P01～03・23～26

SD01



SD02・SG02



SD01土層説明

1 褐灰色土　7.5YR4/1　砂・黒色粘土ブロックまばらに含む。しまり有、粘性強。

2 褐灰色土　7.5YR5/1　砂・黒色粘土ブロックまばらに含む。しまり有、粘性強。

SD02・12土層説明

1 褐灰色土　7.5YR4/1　砂・灰色粘土・黒色粘土粒まばらに含み、鉄分沈着する。しまり・粘性有。

2 褐灰色土　7.5YR4/1　砂多量に含む。しまり・粘性有。

3 褐灰色土　7.5YR4/1　砂・黒色粘土ブロック多量に含む。しまり・粘性有。

4 褐灰色土　7.5YR4/1　砂・黒色粘土粒まばらに含む。しまり有、粘性強。

5 褐灰色土　7.5YR4/1　砂・炭化物・黒色粘土ブロックまばらに含む。しまり有、粘性強。

6 褐灰色土　7.5YR4/1　砂・炭化物多量に含む。しまり有、粘性強。

SG02土層説明

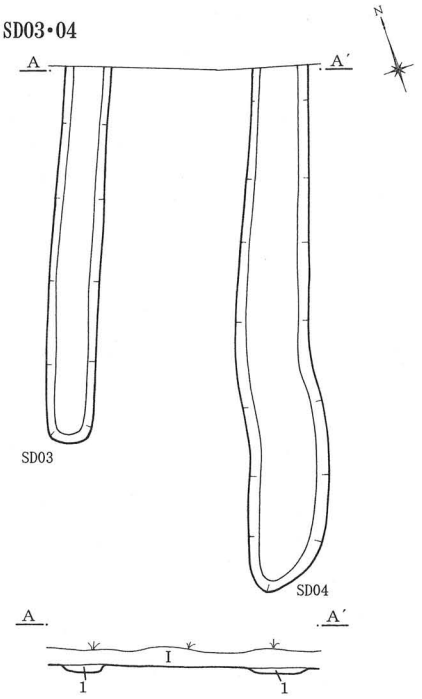
1 褐灰色土　7.5YR4/1　砂利多量に含む。しまり有、粘性強。

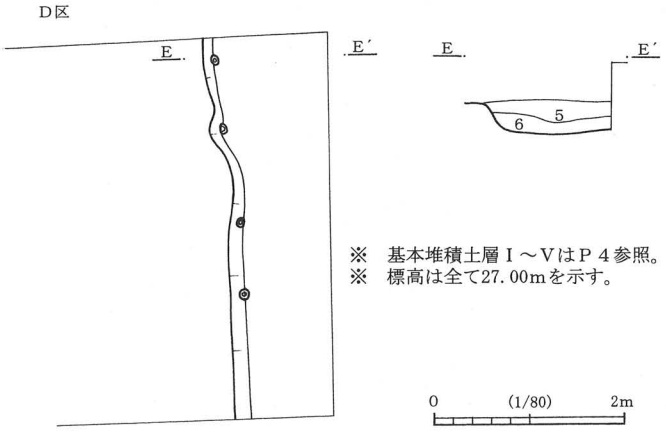
2 褐灰色土　7.5YR4/1　砂利・植物遺体多量に含む。しまり有、粘性強。

SD03・04土層説明

1 褐灰色砂質土 7.5YR4/1　砂・炭化粒密に含む。しまり・粘性有。

SD03・04



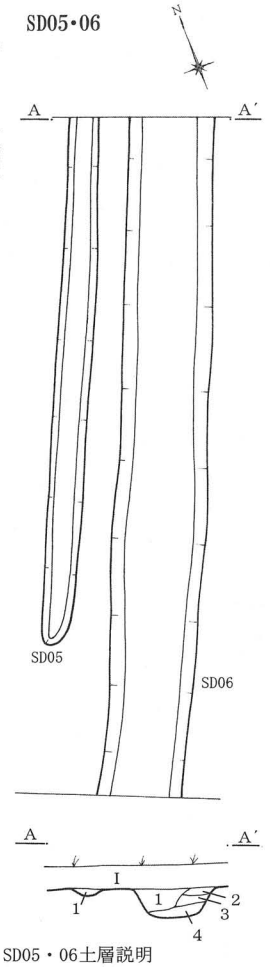


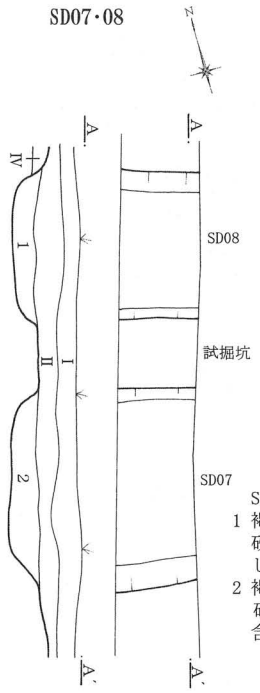
※　基本堆積土層Ⅰ～ⅤはＰ４参照。
※　標高は全て27.00mを示す。

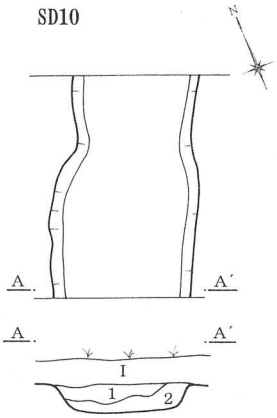
0　(1/80)　2m

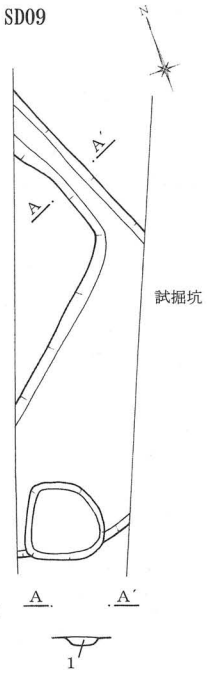
SD01～04・12、SG02

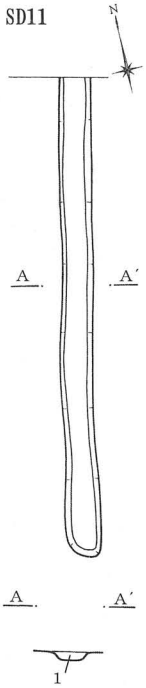
図面3（遺構）









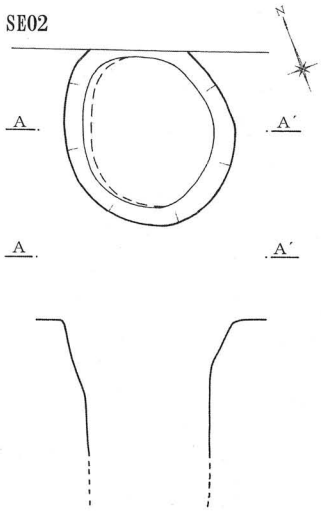


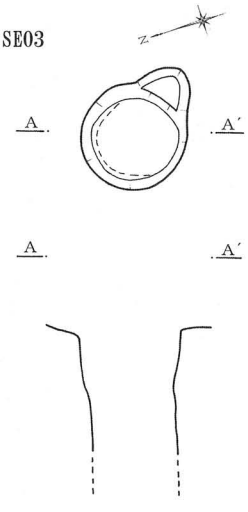
SD10土層説明
1 褐灰色土　7.5YR4/1
砂・黄褐色粘土ブロックまばらに含む。しまり有、粘性強。
2 褐灰色土　7.5YR4/1
砂・黒色粘土ブロック多量、炭化粒少量含む。しまり有、粘性強。

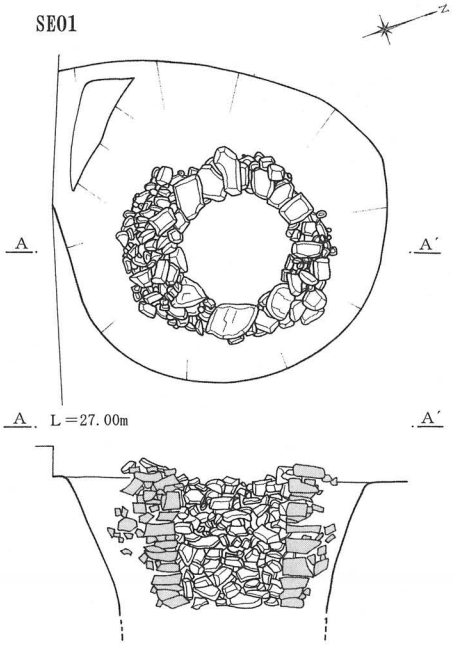
SD09・11土層説明
1 褐灰色砂質土　7.5YR4/1　砂・炭化粒密に含む。しまり・粘性有。

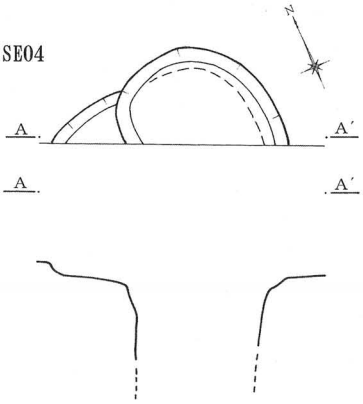
SD07・08土層説明
1 褐灰色砂質土　7.5YR4/1　砂・炭化物密に含む。しまり・粘性有。
2 褐灰色砂質土　7.5YR4/1　砂・炭化物・灰色粘土粒密に含む。しまり有、粘性強。

SD05・06土層説明
1 褐灰色砂質土　7.5YR4/1　砂・炭化粒密に含む。しまり・粘性有。
2 褐灰色土　7.5YR4/1　砂まばらに含む。しまり・粘性有。
3 黒褐色粘土　7.5YR3/1　炭化物まばらに含む。しまり有、粘性強。
4 褐灰色粘土　7.5YR4/1　炭化物まばらに含む。しまり有、粘性強。







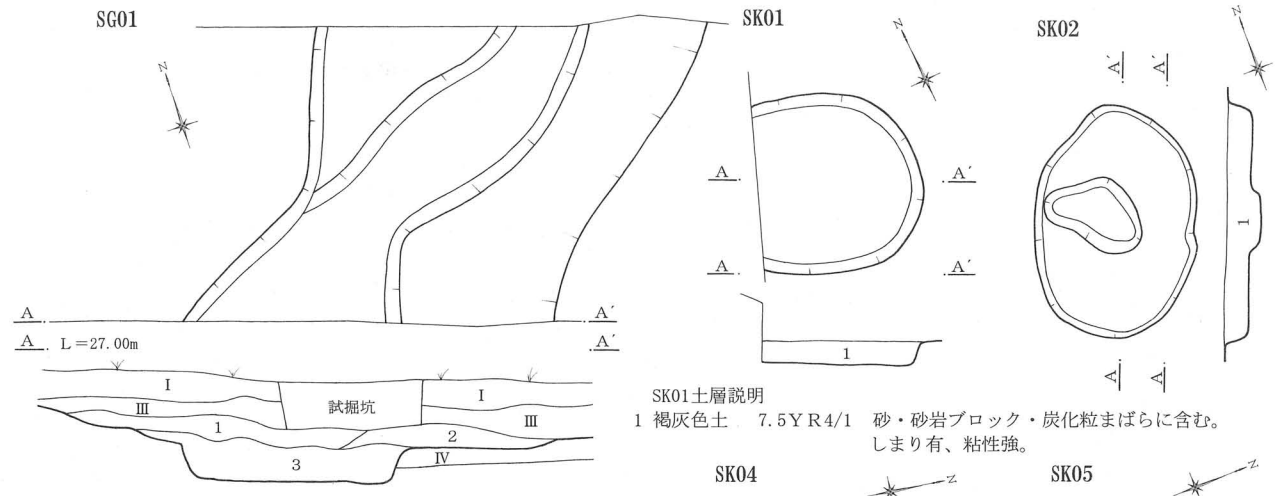


※　基本堆積土層Ⅰ～ⅤはP４参照。
※　標高は全て27.00mを示す。

SE01土層説明
1 褐灰色土　7.5YR4/1　砂・炭化材・焼土・粘土ブロック多量に含む。しまり有、粘性強。

0　(1/80)　2m
0　(1/60)　2m

SD05～11、SE01～04

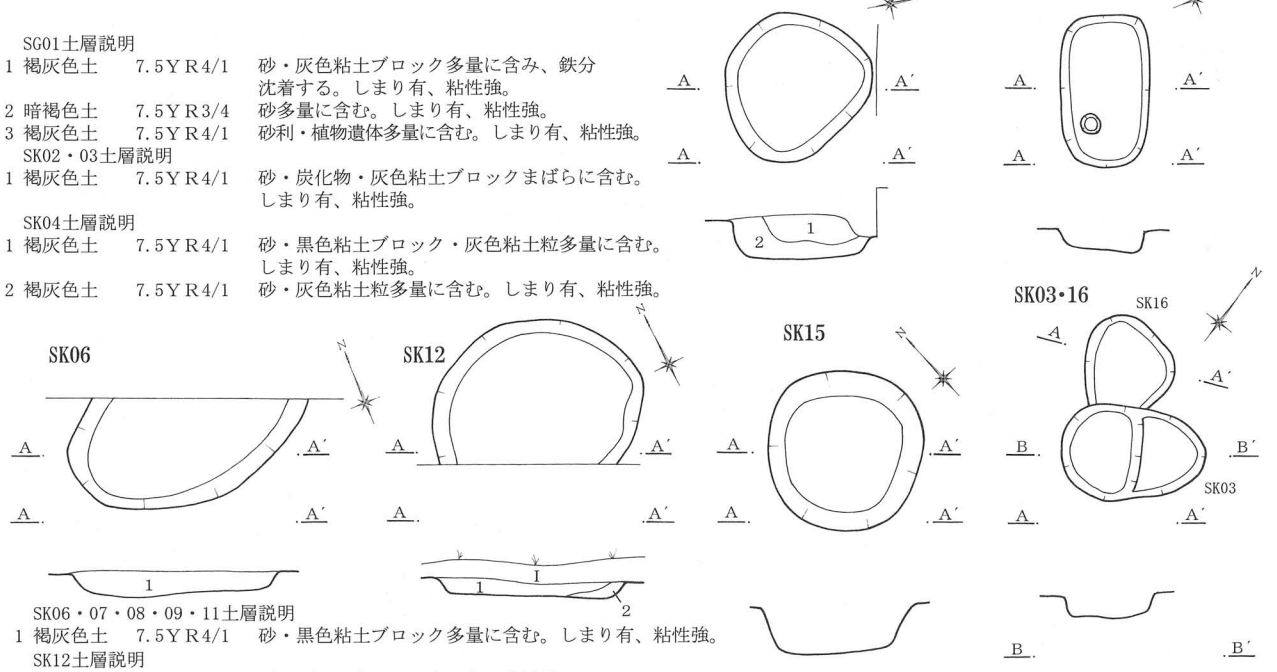


SK01土層説明
1 褐灰色土　7.5ＹＲ4/1　砂・砂岩ブロック・炭化粒まばらに含む。しまり有、粘性強。

SG01土層説明
1 褐灰色土　7.5ＹＲ4/1　砂・灰色粘土ブロック多量に含み、鉄分沈着する。しまり有、粘性強。
2 暗褐色土　7.5ＹＲ3/4　砂多量に含む。しまり有、粘性強。
3 褐灰色土　7.5ＹＲ4/1　砂利・植物遺体多量に含む。しまり有、粘性強。

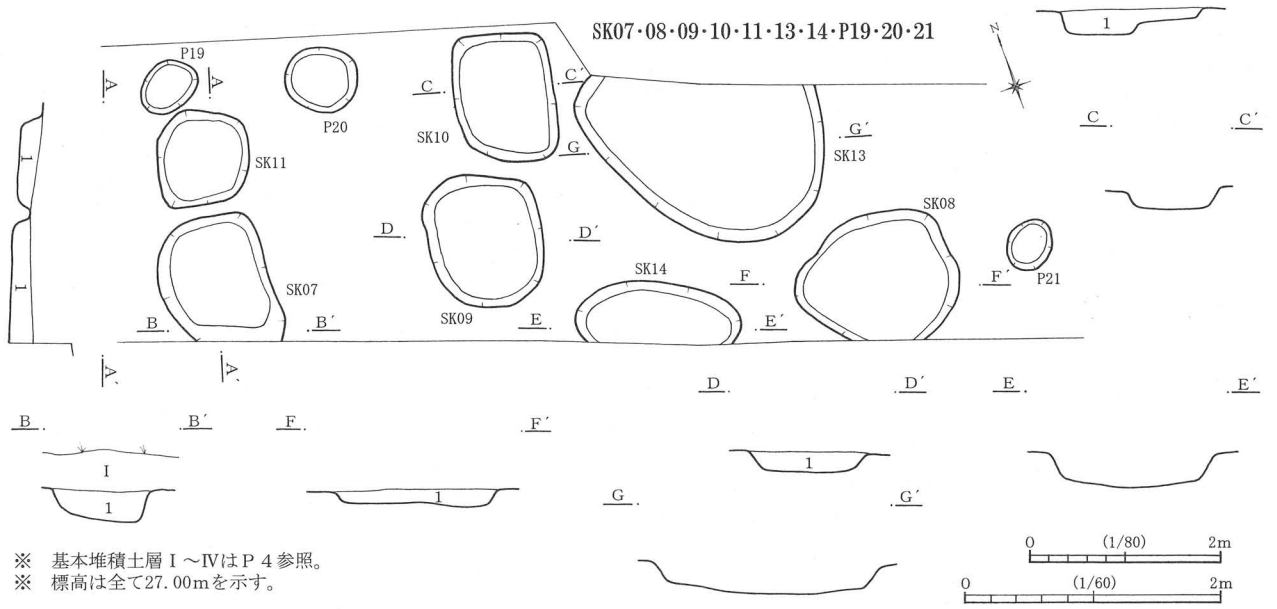
SK02・03土層説明
1 褐灰色土　7.5ＹＲ4/1　砂・炭化物・灰色粘土ブロックまばらに含む。しまり有、粘性強。

SK04土層説明
1 褐灰色土　7.5ＹＲ4/1　砂・黒色粘土ブロック・灰色粘土粒多量に含む。しまり有、粘性強。
2 褐灰色土　7.5ＹＲ4/1　砂・灰色粘土粒多量に含む。しまり有、粘性強。



SK06・07・08・09・11土層説明
1 褐灰色土　7.5ＹＲ4/1　砂・黒色粘土ブロック多量に含む。しまり有、粘性強。

SK12土層説明
1 褐灰色土　7.5ＹＲ4/1　砂まばらに含む。しまり有、粘性強。
2 褐灰色土　7.5ＹＲ4/1　砂・黒色粘土ブロックまばらに含む。しまり有、粘性強。

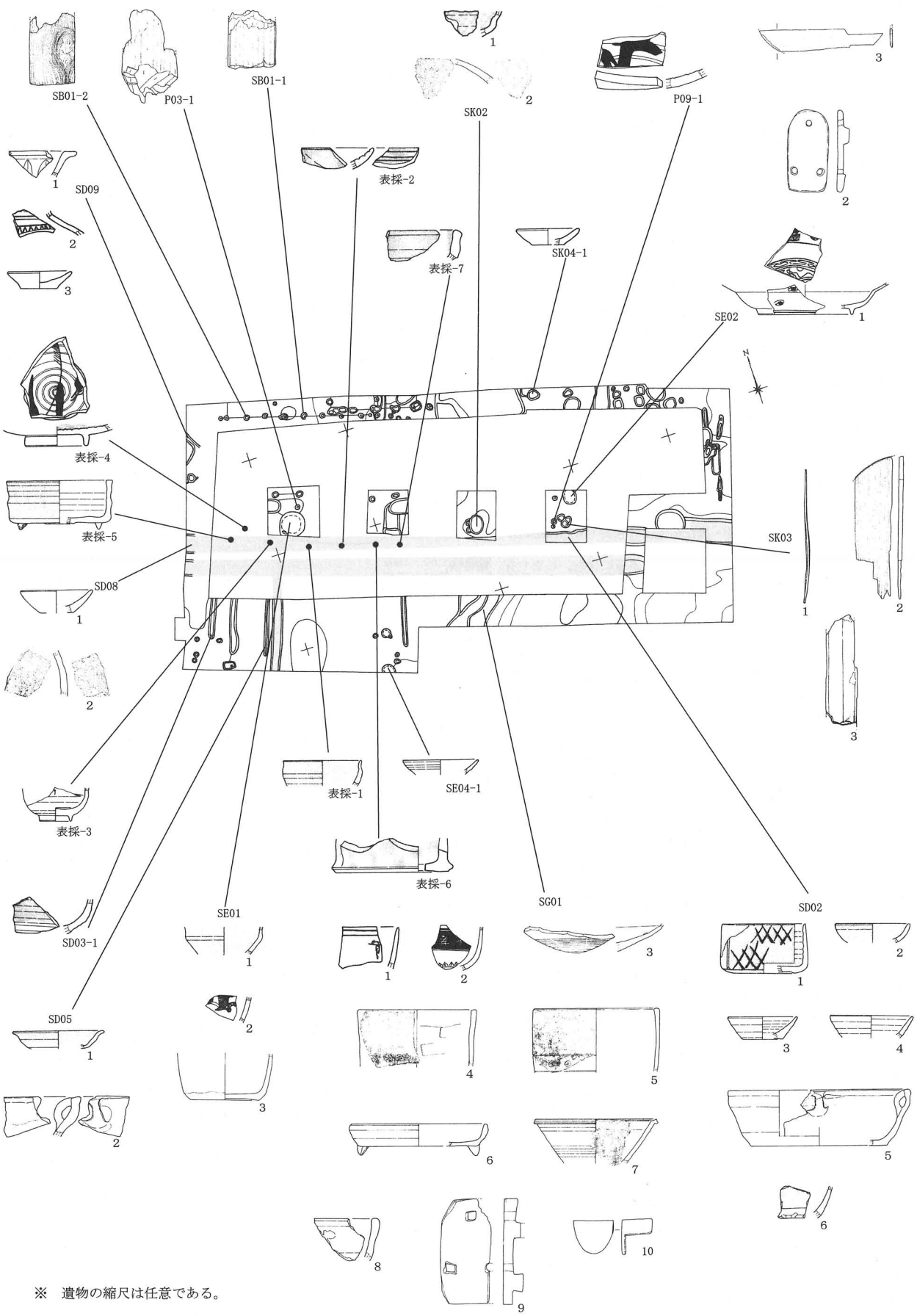


※　基本堆積土層Ⅰ～Ⅳは P４参照。
※　標高は全て27.00mを示す。

0　(1/80)　2m
0　(1/60)　2m

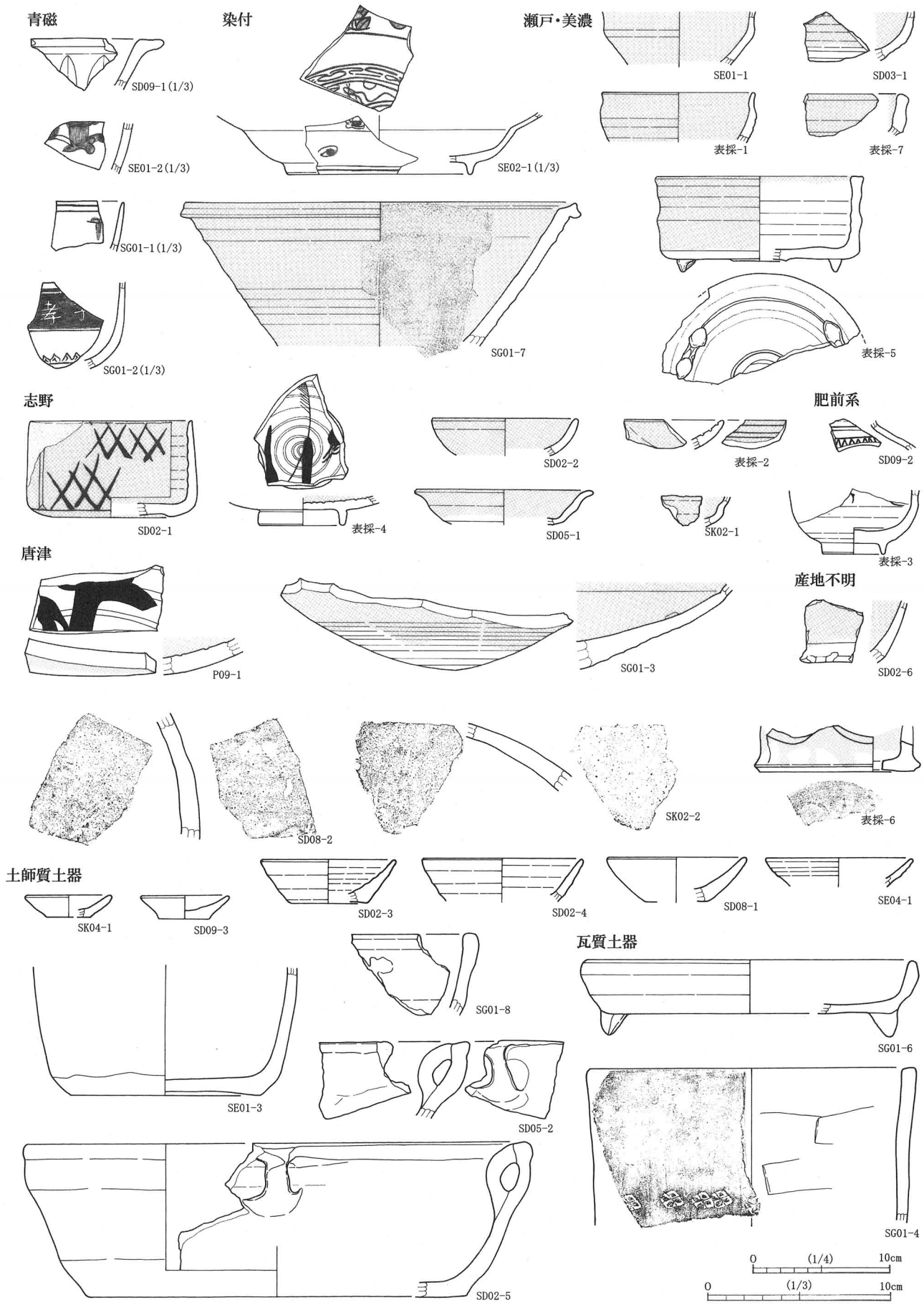
SG01、SK01～16、P19～21

図面5（遺物）



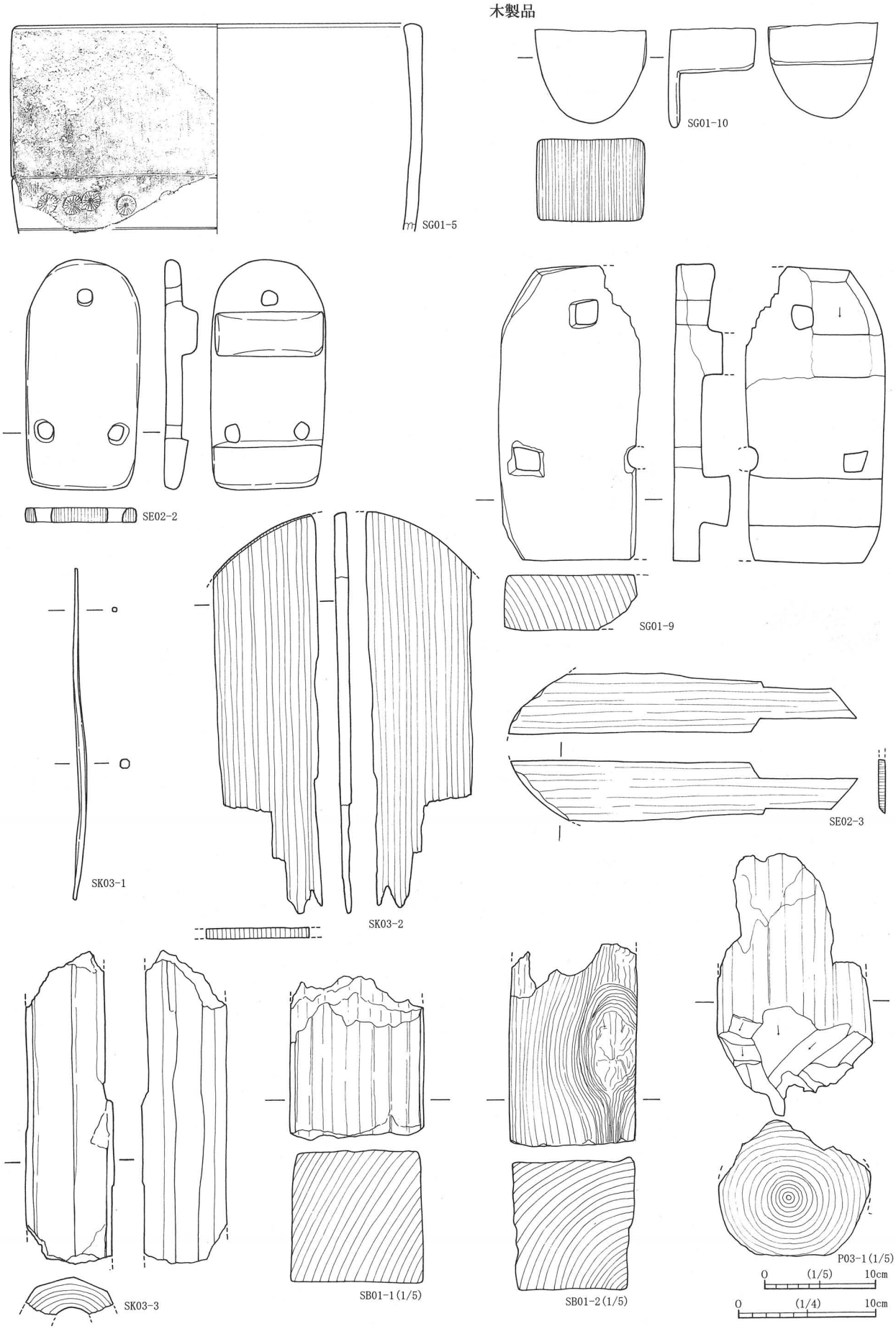
※　遺物の縮尺は任意である。

遺物分布図


青磁
SD09-1(1/3)
SE01-2(1/3)
SG01-1(1/3)
SG01-2(1/3)
染付
SE02-1(1/3)
SG01-7
瀬戸・美濃
SE01-1
SD03-1
表採-1
表採-7
表採-5
志野
SD02-1
表採-4
SD02-2
SD05-1
表採-2
SK02-1
肥前系
SD09-2
表採-3
唐津
P09-1
SG01-3
産地不明
SD02-6
SD08-2
SK02-2
表採-6
土師質土器
SK04-1
SD09-3
SD02-3
SD02-4
SD08-1
SE04-1
SG01-8
瓦質土器
SG01-6
SE01-3
SD05-2
SG01-4
SD02-5
0 (1/4) 10cm
0 (1/3) 10cm

出土遺物 (1)

木製品

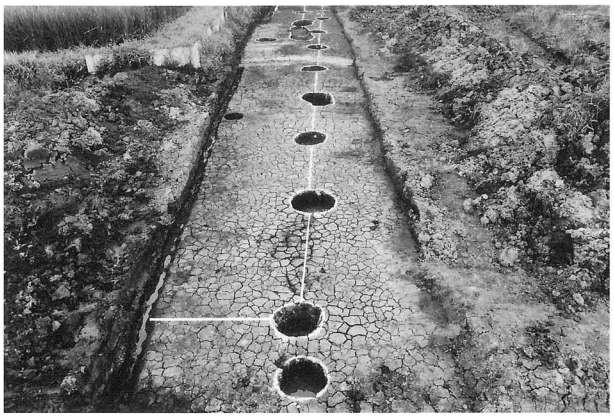

SG01-5
SG01-10
SE02-2
SG01-9
SE02-3
SK03-1
SK03-2
SK03-3
SB01-1(1/5)
SB01-2(1/5)
P03-1(1/5)
0 (1/5) 10cm
0 (1/4) 10cm

出土遺物 (2)

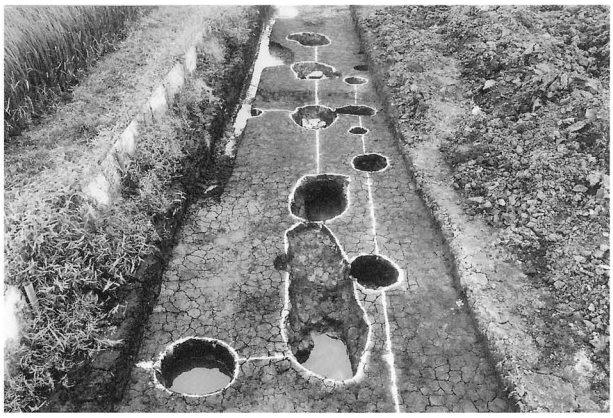
図版1（遺構）

調査区 現況（南西より）

調査区 全景（南西より）

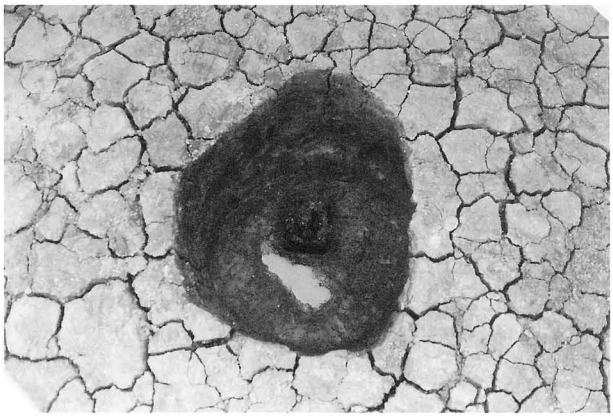


SB01 全景（西より）

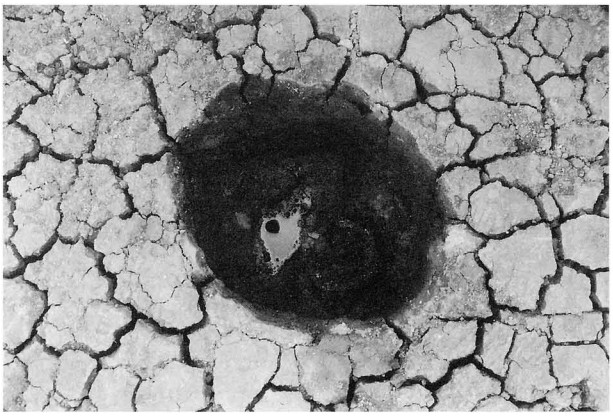


SB02 全景（西より）

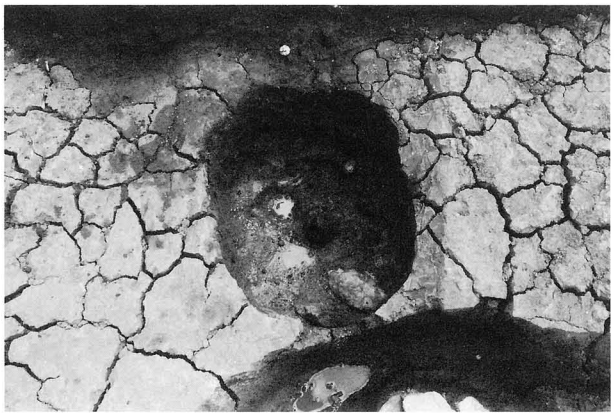
SB01P3 近景（北より）



同 P6 近景（北より）

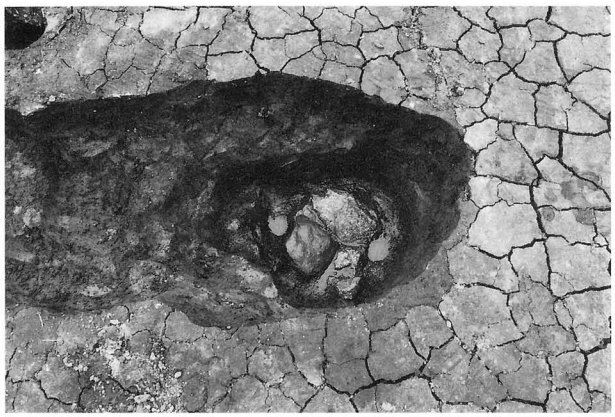


同 P9 近景（北より）

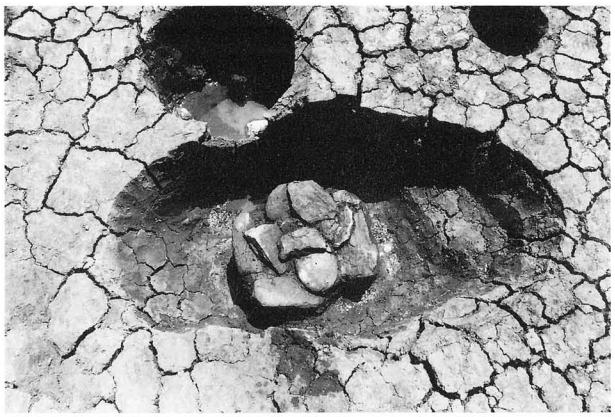


同 P11 近景（北より）

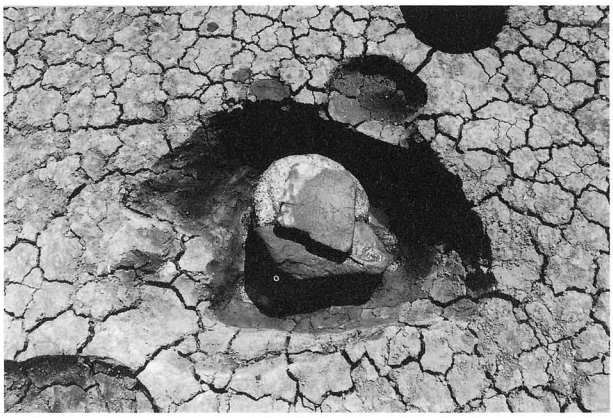
図版2（遺構）



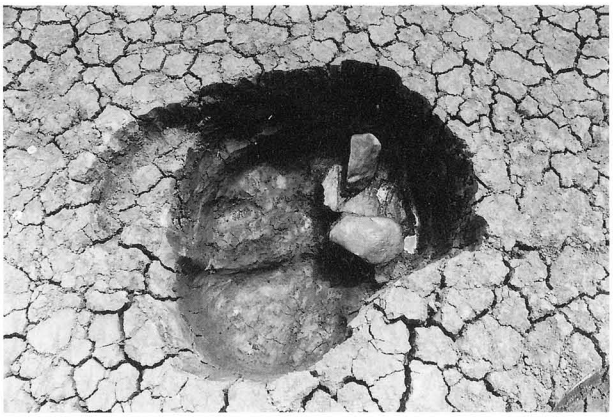
SB02P1 近景（北より）



同 P3 近景（北より）



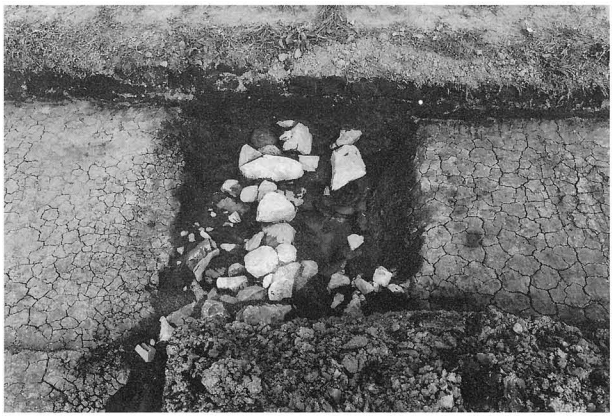
同 P4 近景（北より）



同 P5 近景（北より）

SD01、P05 全景（西より）

SD02 東端石組検出状況（北より）



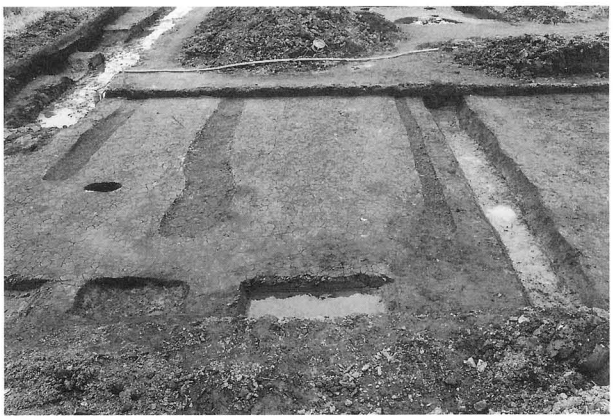
同 石組検出状況（西より）

同 石組構築状況（西より）

SD02・12 全景（西より）

SD02 D区 全景（西より）

SD07・08 全景（東より）

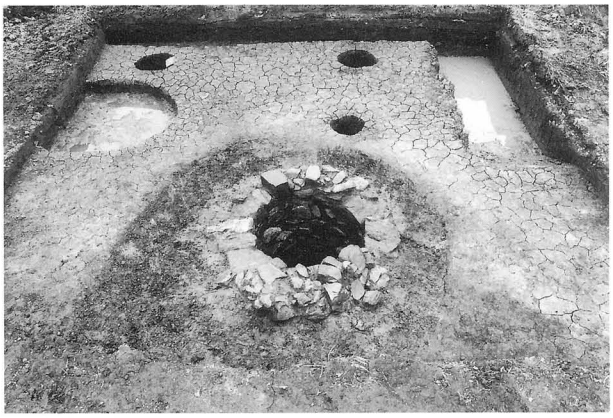


SD03・04・05・06、SK05 全景（南より）

SD09 全景（東より）

SD10、SK07・11、P19 全景（北より）

SD11、SE03・04、P15・16・17 全景（南より）



SE01、SK01、P01・02・03 全景（南より）

図版4（遺構）

SE01 構築状況（東より）

SE02 検出状況（西より）

SE03 検出状況（東より）

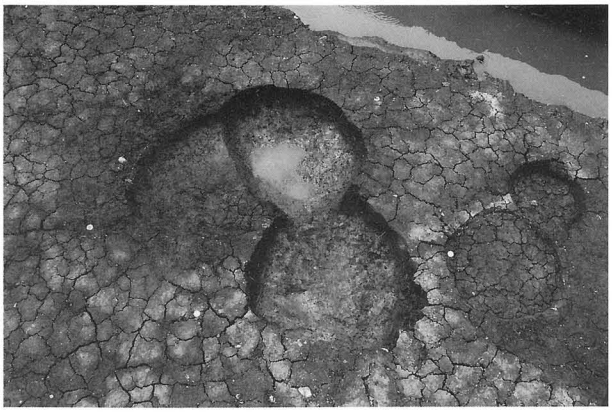
SE04 検出状況（北より）

SG01 全景（北より）

SG02 全景（北より）

SK01 全景（南より）

SK02、P06・07 全景（南より）



SK03・16、P09・10 全景（北西より）

SK04 全景（東より）

SK05 全景（西より）

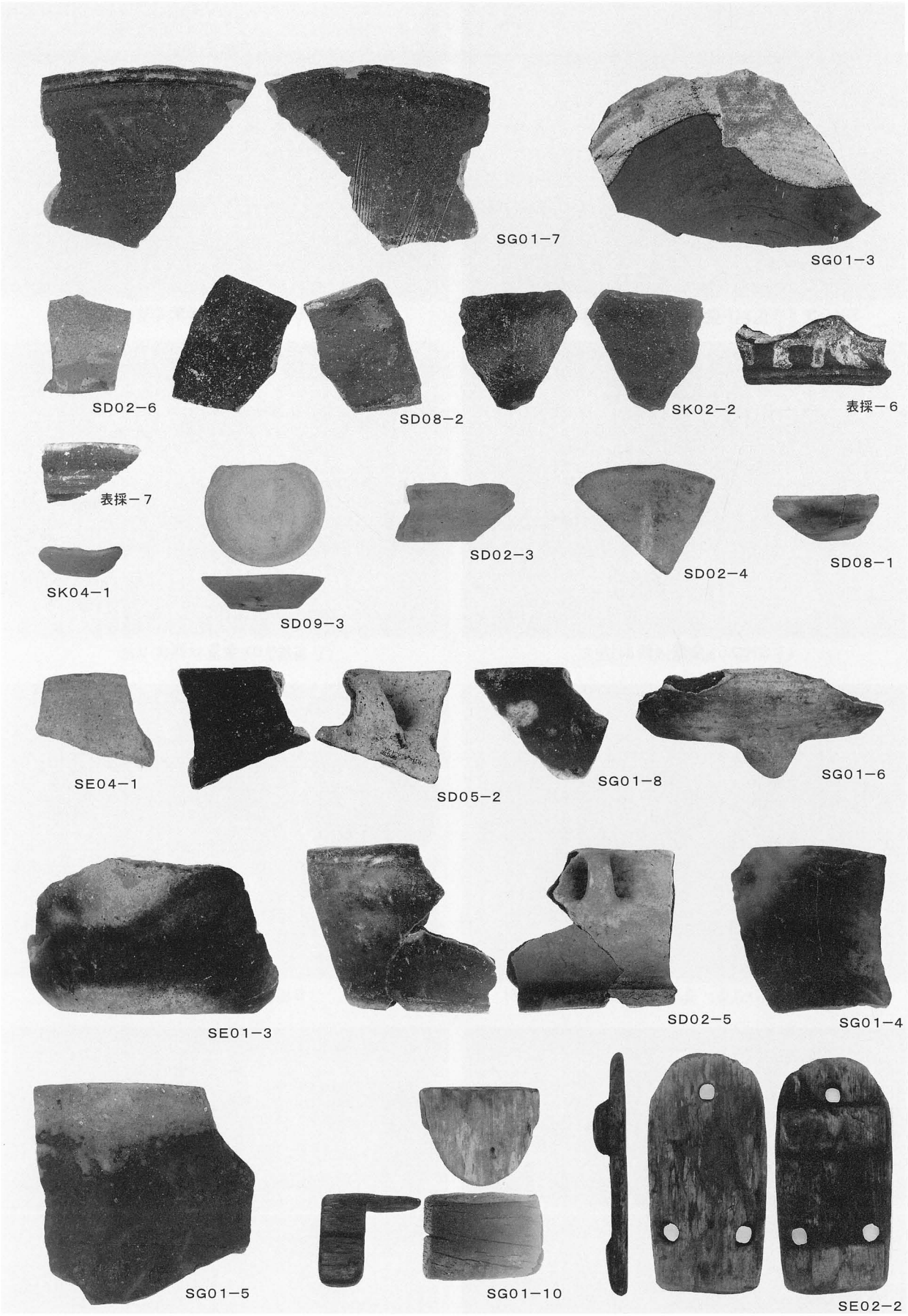
SK06 全景（西より）

SK08・09・10・13・14 全景（東より）

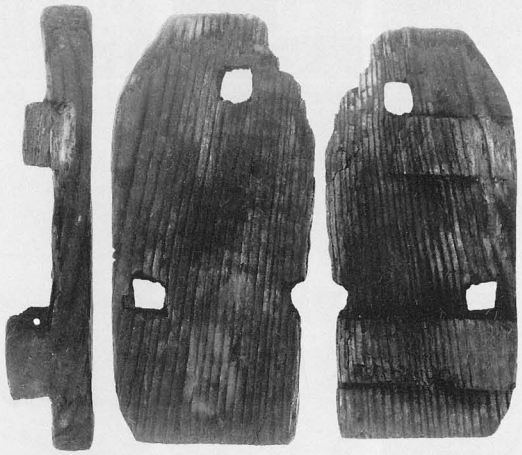
SK12 全景（北より）

SK15 全景（東より）

1号整地面全景（南より）

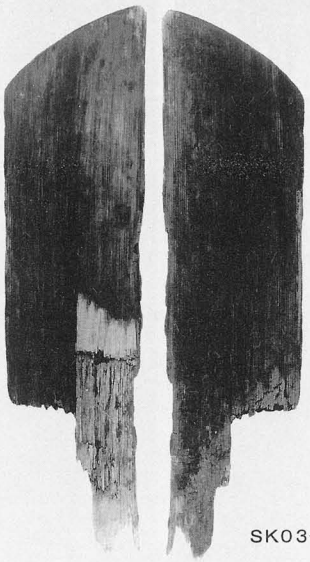

SG01−7
SG01−3
SD02−6
SD08−2
SK02−2
表採−6
表採−7
SK04−1
SD09−3
SD02−3
SD02−4
SD08−1
SE04−1
SD05−2
SG01−8
SG01−6
SE01−3
SD02−5
SG01−4
SG01−5
SG01−10
SE02−2

出土遺物（2）

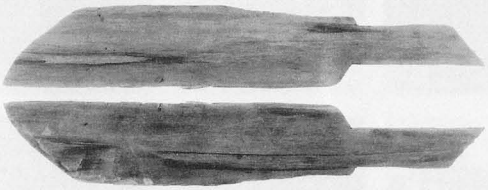


SG01−9

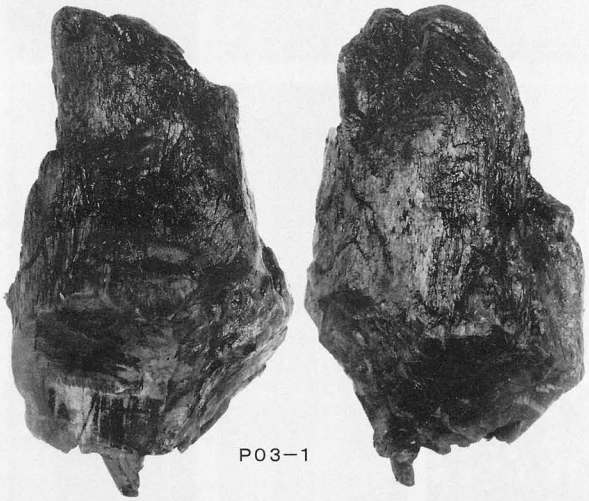
SK03−1



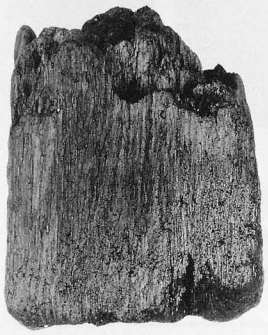
SK03−2



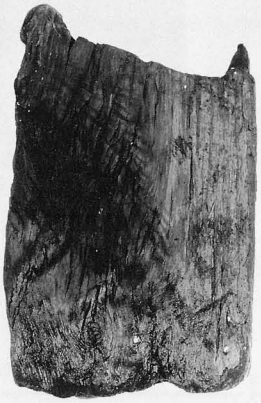
SE02−3



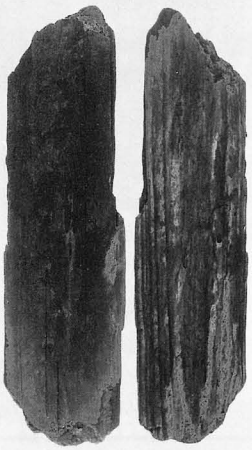
P03−1



SB01−1



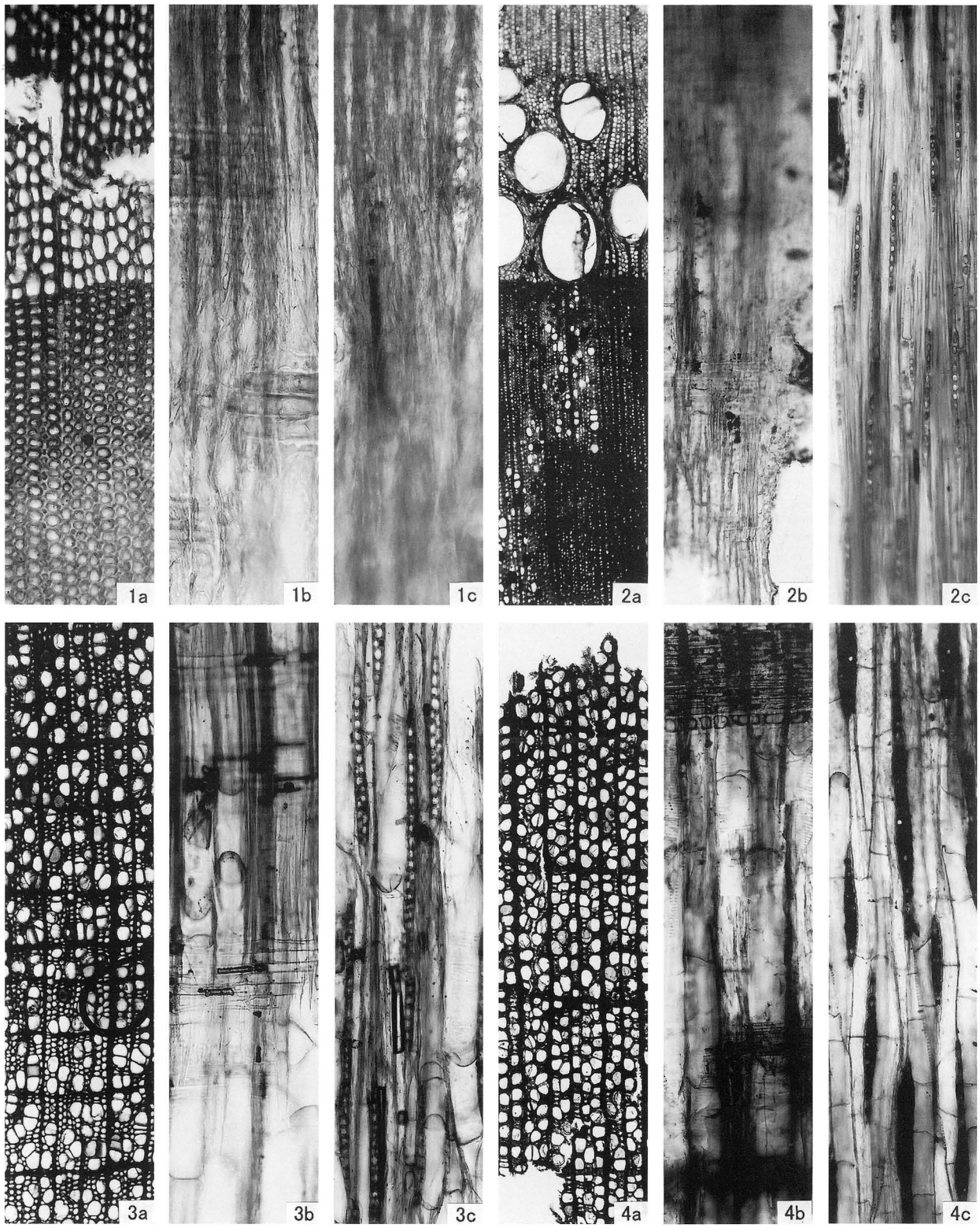
SB01−2



SK03−3

出土遺物（3）

図版8（分析）



1. マツ属複維管束亜属（試料番号2）
2. クリ（試料番号4）
3. モクレン属（試料番号1）
4. カツラ（試料番号3）
   a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：2-4a
200 μm：1a・2-4b,c
100 μm：1b,c

樹種同定木製品顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	ししどじょうあと
書名	宍戸城跡
副書名	店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	間宮正光
編集機関	山武考古学研究所　〒286-0045　千葉県成田市並木町221番地　TEL　0476-24-0536
発行機関	株式会社コメリ／山武考古学研究所
発行年月日	西暦　2006 年　11 月　17 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ししどじょうあと 宍戸城跡	いばらきけんかさましたいらまち 茨城県笠間市平町 あざとのまち 字殿町　78-1、79-1	08216	旧友部町 042	36° 20′ 17.25″	140° 17′ 22.54″	20060728～ 20060810	678.17㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宍戸城跡	城館	江戸時代 （17世紀初頭～前半）	建物跡　2棟 溝跡　12条 井戸跡　4基 池跡　2基 土坑　16基 ピット　26基	縄文早期土器片、土師器片、 貿易陶磁(青磁蓮弁文盤、染付碗・皿) 瀬戸・美濃(天目茶碗、碗、香炉、擂鉢、志野丸皿・鉄絵皿・鉄絵向付、織部皿類) 唐津(鉄絵皿、鉢) 肥前系(染付碗、瓶) 常滑(甕、鉢) 土師質土器(小皿、内耳土鍋、土鍋) 瓦質土器(火鉢、擂鉢) 木製品(下駄、蓋、箸、柱)	調査地は3軒の武家屋敷にあたっており、正保年間に作成された「宍戸城下絵図」と合致する状況にあった。調査の主体となったのは、坂田権之助200石の屋敷地で溝に区画された中に井戸・池・建物が配置されていた。とくに井戸は石組で構築され、茶陶をはじめとした豊富な陶磁器が出土しており200石取りの生活を物語っている。

要約	調査では、溝に区画された3軒の武家屋敷の存在が明らかとなっている。とくに調査区の北部では間口を東にとり東西を主軸とする短冊型の屋敷地が確認され、入り口付近に素掘り、奥の西端に石組の井戸が検出された。石組井戸の北には2時期にわたり大型の建物が展開し、さらにこの付近からは、2時期に大別できる貿易・国内陶磁器が出土しており、屋敷内における中心的な空間と判断され、近世初頭における武家屋敷の空間構成をおぼろげながらうかがうことができた。

資料の取り扱い

水洗い	・すべて行った。
注記	・インクジェットプリンターを使用し、次の略号にしたがって遺跡名、遺構番号、出土位置の順で注記した。 宍戸城跡→シシドジョウH18　建物跡→SB　溝跡→SD　井戸跡→SE　池跡→SG　土坑→SK　ピット→P 例）SB01P1出土遺物－シシドジョウH18-SB01-P1　SE01出土遺物－シシドジョウH18-SE01
復元	・接合は全てに対して実施した。
実測	・遺構実測図は青線にて図面修正を加えている。 ・遺物実測図は、報告書掲載分についてのみ作成した。 ・遺物実測図で、拓図が伴う場合にはコピーを添付している。
写真撮影	・遺物写真は、使用した遺物に対して全て撮影した。 ・写真は、撮影内容・方向・日時など必要事項を記載のうえ台帳を作成し収納した。
台帳	・遺物台帳・図面台帳・写真台帳があり、検索が可能なように作成している。
遺物保管方法	・遺物は、報告書使用の遺物番号で統一し、保管している。 ・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、遺物収納箱に収め、各箱には収納内容を明記した。

宍戸城跡

－店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

印　刷	平成18年11月13日
発　行	平成18年11月17日
編　集	山武考古学研究所
発　行	株式会社コメリ 山武考古学研究所
印　刷	㈲京文社印刷 TEL 043（242）0064